

# カウンセリング過程とその評価に関する研究 (I)

— ロジャーズの過程尺度の事例的研究を中心として —

# 目 次

はじめに	1
I 研究目的	3
II 研究仮説	3
III 研究事例の紹介	4
1 Y事例について	4
2 M事例について	5
IV 研究方法	6
1 研究の対象と手順	6
2 調査基準と評定尺度	7
3 過程尺度の概要	7
4 調査と評定の手続	12
V 研究結果	13
1 過程尺度による評定結果とその分析	13
2 クライアント範ちゅうによる分類結果とその分析	16
3 親子関係診断テスト結果とその分析	20
4 矢田部ギルフォード性格検査結果とその分析	23
5 社会成熟度診断検査結果とその分析	26
6 田中ビネー式知能検査結果	29
7 学校担任教師の評定と所見	29
VI まとめと考察	30
1 研究仮説1について	31
2 研究仮説2について	31
3 研究仮説3について	32
4 研究仮説4について	33
お す び	34

## はじめに

### 1 カウンセリング過程の方程式

カウンセリング(counseling 相談面接)において、カウンセラー(counselor 面接相談員)とクライアント(client 来談者)との関係のなかに、ある一定の条件が存在する場合、クライアントのパーソナリティ(personality 以下人格という)に、ある一定の変容が生ずるとすれば、その条件と結果をまとめて1つの方程式を構成することができる。もしこのような方程式が構成されるならば、それはカウンセリングにとって、まことに画期的なことであろう。

ロジャーズ(Rogers, C. R.)は、彼が提唱する来談者中心カウンセリング(client centered counseling)といわれる心理療法(psychotherapy 以下カウンセリングという)において、クライアントに生ずる人格変容の過程を公式化しようと試み、彼の試論的な仮説として1つの方程式を構成した。すなわち、ロジャーズは、「われわれが自分たちの力で、かなり大きかであるがいくつかの方程式を作ることができるようになったので、非常に心強く思っている。われわれは、それを化学方程式にも匹敵し得る程の公式にして述べることができるのである。……中略……換言するならば、われわれは心理療法(カウンセリング)における原因と結果に関して、かなり客観的な知識をもっているのである。」(注1)と述べている。

### 2 カウンセリング過程の方程式の左辺

この方程式の左辺を構成する要素は、「カウンセリングにおける人格変容の必要にして、じゅうぶんな条件」として、6条件にまとめられており、その内容は次のとおりである。

- 1) ふたりの人が接触していること。
- 2) われわれがクライアントと呼ぶ一方の人間は、不一致の状態にあるか、傷つきやすい状態にあるか、不安な状態にあること。
- 3) 他方の、われわれがカウンセラーと呼ぶ人は、ふたりの関係のなかでは一致した状態にあること。
- 4) カウンセラーは、クライアントに対して無条件の積極的な関心を経験していること。
- 5) カウンセラーは、クライアントの内的な枠組を感情移入的に理解するという経験をしていること。
- 6) クライアントは、条件4)および5)、すなわち自己に対するカウンセラーの無条件の積極的な関心と感情移入的理解を、少なくとも最少限度は知覚していること。(注2)

カウンセリングにおいて、上に述べた諸条件がそろった時のみ、クライアントに建設的な人格変容が生じはじめることが多いのであり、これらの条件が満たされない場合はけっして建設的な人格変容は生じないものと仮定されている。

このような6条件が、方程式の左辺に存在すれば、方程式の右辺には、どのような結果が生じるであろうか。すなわち、カウンセリングにおいてクライアントに生じる建設的な人格変容とは、どのような

ものであり、またそれがどのような過程をたどって生じるかということが重要な問題になる。

### 3 カウンセリング過程の方程式の右辺

ロジャーズは、カウンセリングにおけるクライアントの人格変容の過程を、連続体(continuum)という概念でとらえ、それは変容と発達の高い登り坂であると述べている。すなわち、クライアントはそれぞれ、その坂道のある地点からカウンセリングにはいり、カウンセリングの条件が満たされているかぎり彼は坂道を下へくぐることはあり得ないとされている。

この坂道の下の方にいるクライアントの心理的機能の特徴は、柔軟性を欠き(rigid)、静式的(static)であり、未分化(undifferentiated)であり、無感情(unfeeling)であり非個人的な(impersonal)ものである。それらがいろいろの段階を経て上の方に至ると、変易性(changiness)、流動性(fluidity)、豊かに分化された感情、ならびに個人的な感情の直接的経験などという特徴をもつ機能があらわれてくる。

したがって、カウンセリングが目ざす究極の目標は、クライアントが現在の瞬間において完全に生きる(full living)という方向に向かって動くことであり、頑固に合理化しながら、無理におしつけられた期待に同調していくというやり方から遠ざかっていくことである。それは、クライアントのもっているすべての感受性(sensitivities)を調和的に実現していくことであり、それによってその個人が、その瞬間において彼の中に起こっていることをじゅうぶんに知ることができ、そして同じくらいじゅうぶんに、彼をとりまく環境の要求とその現実を敏感に知ることである。この時のクライアントの行動は、内的、外的のすべての刺激に対する、敏感にして調和的な適応となるのである。(注3)

このようなクライアントの変容とその過程に関する仮説、すなわち方程式の右辺は、左辺と比較してさらに変化に富み、またさらに試験的なものであるように思われる。

### 4 カウンセリングの過程尺度

ロジャーズとラブレ(Rablen, R. A.)は、「心理療法の過程尺度」(A Scale of Process in Psychotherapy)という論文で、カウンセリングにおいて、クライアントに建設的な人格変容が生ずる過程、すなわちカウンセリング過程方程式の右辺を、できるだけ客観的に、は握し評定するための過程尺度(process scale)を発表した。(注4)

ロジャーズは、カウンセリングにおけるクライアントの人格変容の過程を解明しようとして、彼自身の治療的経験事実を、まず他のいろいろの理論的枠組——コミュニケーションの理論、学習の理論など——にあてはめてみようと考えた。それらのなかには、フィード・バック(feed back)や入出力信号(input and output signals)などのように興味あるものがあり、しかも有効であると考えられるものがあった。しかし彼はあえてこれを避けた。彼はクライアント——カウンセラーというふたりの関係のなかで生じることがらにひそむなんらかの法則性や体系を、カウンセリング関係そのものに即してとらえようと試みた。この結果理論的に構成されたものが過程尺度である。(注5)

この過程尺度は、すでに述べたとおり、クライアントの連続的な心理的変容を評定するものであり、それは、クライアントの人格を、すなわち頑固な固着した心理的機能水準をあらわすものから、柔軟な変容性、流動性という特徴を示す心理的機能水準をあらわすものまでを、七つのストランズ(strands 撚り糸)——10ページ参照——によって、7段階(stage)に分けて記述し評定しようとするもの

である。

この過程尺度について、山本和郎氏や越智浩示郎氏は、「過程尺度では、その尺度の記述にあたって客観的な手がかりを入れたり、主観的な層での記述を入れたりして統一がとれていない。」(注6)と批判しているが、ロジャーズ自身もまた「現行の尺度は、最終的な段階に達したものであるという考えで提案されているのではない。それは、カウンセリング過程の性質についてのわれわれの考察とともに成長してきたものであり、この尺度が最大限に役立つためには、まだまだっと発展し、精製される必要があると考えている。」(注7)と述べて、まだ検討すべき問題点が残されていることを指摘している。しかし伊東博氏は「この過程尺度は、ロジャーズ派の新しい考え方に基づいた——おそらく読者は、クライアントの過程のなかで、実存主義的人間の生成が具体的に表現されているのを感じとることができるであろう——一つの試案であり、一つの冒険であり、あるいは一つの挑戦であるということができよう。」(注8)、また「過程尺度は、現在その信頼性、妥当性を検証する段階にあるが、カウンセリング過程をカウンセリング関係そのものに即して、とらえることができる一つの手がかりとして注目すべきものである。」(注9)と紹介されている。

以上に述べたように、過程尺度はクライアントの人格変容の度を、カウンセリング関係そのものに即して、は握ることが可能な一つの手がかりとして注目されている。しかしこの尺度がクライアントの人格変容の度を握るための、いっそう有効な尺度となるためには、さらに多くの事例に適用して、その信頼性と妥当性を吟味することによって、その評定基準をいっそう客観化することが必要と考える。

## I 研究目的

ロジャーズの過程尺度を用いて、カウンセリング過程にみられるクライアントの人格変容の度を評定するとともに、彼が試論的な仮説として、理論的に構成した過程尺度の信頼性と妥当性を検討する。

## II 研究仮説

過程尺度の信頼性と妥当性を検討するにあたって、まず第1に追究すべき問題は、カウンセリング後期についての過程尺度評定値は、カウンセリング初期についての評定値より高いかどうかである。というのは効果的なカウンセリング——カウンセリングの条件が満たされているカウンセリング——におけるクライアントの人格変容の過程は、連続的な、建設的な過程であると仮定されているからである。したがって、カウンセリング後期についての過程尺度評定値は、初期についての評定値よりも、たとえ少量であっても高くなければ、過程尺度の信頼性が問題となろう。

第2に追究すべき問題は、過程尺度評定値によって、成功度の高いクライアントと成功度の低いクライアントを弁別し得るかどうかである。というのは過程尺度評定値がどんなに高くても、クライアント自身の現実の問題が解消せず、彼の適応性が低ければ、過程尺度の妥当性が問題となるからである。

したがって、この研究の目的を追究するために、次の四つの研究仮説を設定する。

研究仮説1 継続的なカウンセリングにおいて、カウンセリングが効果的であるならば、カウンセリ

ング後期の回についての過程尺度評定値は、カウンセリング初期の回についての評定値よりも高いであろう。

研究仮説2 過程尺度評定値の変動には、カウンセリングの各回ごとの変動と全回をとおしての変動がある。各回ごとの変動は、どの回においても、初期よりも後期が高いであろうが、どの回における変動も、全回をとおしての変動よりは小さいであろう。

研究仮説3 過程尺度評定値が、カウンセリング初期よりもカウンセリング後期の方が高くなれば、過程尺度以外のいろいろの基準——以下外部の基準とよぶ——に基づく評定によってもなんらかの建設的な人格変容が認められるであろう。また、この逆も言い得るであろう。

研究仮説4 外部の基準によって、建設的な人格変容の度合いが高いと評定されたクライアントに対する過程尺度評定値は、外部の基準によって変容の度合いが低いと評定されたクライアントに対する評定値よりも高いであろう。また、この逆も言い得るであろう。

### III 研究事例の紹介

この研究の対象として、次に述べる2事例を選定した。この2事例は、本年度4月から12月までの間に、当研究所相談室を訪れた事例のうち、カウンセリングの録音が比較的よくとれた事例である。次に受理面接（初回の面接）時における母親の陳述にしたがって、この2事例を紹介する。

#### 1 Y事例について

Y事例は、N市に在住する母子である。Y児は小学校1年生の男子で、本年7月、母親に伴われて当相談室を訪れて以来、10月までに8回にわたり母子にカウンセリング（子どもに遊戯療法）を中心に実施したが、現在カウンセリングは終結している。

##### 1) 主訴

Y児は神経質で、落ちつきがない。また友だちがほとんどなく、家でひとり遊びをしており、最近学校の成績もさがりきみである。

##### 2) 家庭環境

家族は、祖父母、実父（商業、旧制中学校卒、36才）、実母（無職、新制中学校卒、28才）、おじ、本人の6人家族であり、N市内の住宅地域の自宅に住んでいる。地域環境はかなりよいと思われるが、母親は家が自動車の交通量の多い道路に面していることを気にしている。Y児はひとり子であり、したがって、祖母や母親の養育態度には、過保護・盲従・期待などの傾向がみられるが、時にはY児の問題行動が気に入り、厳格にしつける場合もあるようにみえる。しかし母親は、父親が非常に厳格で厳しくしつけるので、Y児はかなり父親をこわがっており、Y児の神経質の原因は父親にあるのではないかと思っている。祖父は病気がちで床にふすことが多く、Y児が家庭内で大声をだしたり騒いだりするのをいやがるという。なお、新潟地震のために家屋にかなりの被害をうけ、一時は非常に落ちつかない生活が続いたという。

##### 3) 生育歴

母親は、妊娠中特にどこか具合が悪かったというわけではないが、なんとなく健康がすぐれず、つわりもひどかった。しかし安産でY児の身長や体重などは標準以上であった。乳児期はミルクなどの人工

栄養で育てたが、発育は順調であった。小さい時から神経質で人見知りをし、近所の友だちとは、ほとんど遊ばず家庭でひとり遊びをしていることが多かったが、知恵づきは早かった。幼稚園や学校へは、初め送らないと登園・登校しなかった。現在はいやいやながらであろうが、ひとりで登校している。しかし学校においても友だちが少なく、休み時間にひとり遊びをしているが、時間中は落ちつきなく、とっぴなことをすることがある。現在の成績は「中」くらいであるが、早のみこみで、じっくり考えない傾向があり、理解している問題を失敗することが多く、最近成績はさがりきみである。

#### 4) 身体状況・性格特徴

偏食、こわがり、かぜにかかりやすい、腹痛をおこしやすい、夜尿(5才まで)、陽気(うちべんけい)、あきっぱい、落ちつき不足、わがまま、依存的、強情、疲れやすい、恥ずかしがり、神経質などの問題がある。

## 2 M事例について

M事例は、N市に在住する母子である。M児は小学校2年生の男子で、本年8月、担任教師のすすめもあって、母親に同伴されて当相談室を訪れてもらい、12月までに16回にわたり母子にカウンセリング(子どもに遊戯療法)を中心に実施しており、現在なお継続中である。

### 1) 主訴

M児は、わがままで何事においても自分の思いどおりにしないと気がすまない。また他人のものをことわりなく使用したり、口答えをしたり、ガムを投げつけたりして道徳心がたりないばかりでなく、乱暴な行動も多く、特に女の子どもや弱い者をいじめたり、石を投げつけたりするが、時には関係のないまわりの子どもに当たり散らし、かみつくとさえる。

### 2) 家庭環境

家族は、実父(商業、小学校高等科卒、36才)、実母(無職—昨年D社を退職—、小学校高等科卒、34才)、本人の3人家族であり、N市内に自宅をもち、かなり裕福な生活を送っているようである。地域環境は、近くに子どものための遊び場もあり、かなりよいと思われる。家庭にはM児専用の勉強室、勉強机があり、いろいろ配慮されているようである。とにかくM児はひとり子であり、母親は彼のすべてのことが気にかかるが、特に彼の問題行動は悩みのたねであり、じっとしておれないように思われる。しかし父親はM児の問題行動について、母親程心配していないように感じられる。それで母親は父親のM児に対する考え方や接し方を「あまい」と評している。

### 3) 生育歴

妊娠3か月頃に、全身麻酔で盲腸手術を受けた。しかし麻酔のためか退院後、体の具合が悪く、特に腹筋で苦しみを感じたので、診察を受けたところ卵巣にゆ着を起しているのではないかと言われたがゆ着はきかかったようであった。しかし非常に心配した。妊娠中のもう一つの心配は、かつて進行性結核をわずらった経験があったので、それが再発するのではないかということであったが、幸いき憂に終わった。

M児が出た時、肩が紫色に変わっており仮死状態であった。体重は2.625gあったが、舌が上あごにゆ着していたので母乳の吸いつきは弱かった。

乳児期においては、母乳が不足し1か月ころからミルクと混合で育て、7か月ころに離乳を完了した。発育はあまり良くなく、歩きはじめは14か月で、おしめは4才ころまでとれなかった。そのうえ言葉

の言いはじめもおそく、また自分で食物を食べようとする事がなかつたので、母親自身もM児を拒否的に扱った。なお、生後40日ころに重い黄だんにかかったり、5か月ころに原因不明の高熱(39℃～40℃)をだしたりして病気がちであった。このためか、その後注射や薬をいやがるようになった。

幼児期になっても、いぜんとして発育が悪く知恵づきもおそかった。幼稚園では、乱暴、いたずら、いじ悪などをすることが多く、担任教師も、まったくもてあましていた。したがって、友だちはなく年下の子どもを相手にして遊んでいたが、放浪癖があり、幼稚園や家庭で大騒ぎをしたことがあった。その当時、家庭においてもわがままで思いやりなく、だだをこねることが多かったので母親は厳しく叱ったが、母親が注意するとばかにされたと思ひ、物を投げたり、衣服をかんだりして困らせた。このころN病院の精神神経科で診察を受けており、脳波にてんかん波があると診断され、薬を服用したが、その後他の病院で診察を受けたところ、異常がないとのことであった。なお、4才のころに舌を切り離す手術を行ない、5・6才ころに2回中耳炎をわずらっている。

母親は、M児が小学校1年生になるまで、D会社に勤めていた。この間、M児は5人の子もりの世話を受けたが、そのなかには厳しく叱ったり、たたいたりする子もりがいた。それで母親が夜勤の時は不安を感じていたようである。なお、母親が退職した直接の理由は、M児が家族のるす中に火遊びをして自宅を焼いたためである。

小学校入学にあたって、M児はあまりにも乱暴なので、母親は厳しくしつけるとともに、算数、国語などを熱心に教えたが、効果は少なかった。小学校1年生当時は、主訴で述べた問題行動のほかにも、放浪性があり、学校では座席にじっとしていることが少なく担任教師を悩ませた。しかし、M児は学校が好きであり、小学校2年生になってから、少しは勉強するようになった。

#### 4) 身体状況・性格特徴

ねつきが悪い、頻尿、偏食、発熱しやすい、短気、落ちつき不足、乱暴、わがまま、強情、いじ悪、依存的、動作がのろい、めんどくさがりなどの問題がある。

## IV 研究方法

### 1 研究の対象と手順

この研究は、母親に実施したカウンセリング・親子関係診断テスト・矢田部ギルフォード性格検査、社会成熟度診断検査、子どもに実施した遊戯療法・田中ビネー式知能検査、ならびに担任教師に記入してもらった教育相談資料B(注10)などの諸結果を用いて、次の手順で研究仮説を検証する。すなわち第1に、カウンセリングの記録に過程尺度を適用して、母親の人格変容の度合を評定し、その評定値の変動を検討することによって、「研究仮説1」および「研究仮説2」を検証する。

第2に、まずカウンセリングの記録を、スナイダー(Snyder, W. U.)のクライアント範ちゅう(client categories)(注11)に基づいて分類し、その結果の分析によって、は握された母親の変容過程と過程尺度評定値の変動との関係を検討する。次に親子関係診断テストや矢田部ギルフォード性格検査などによって、は握された母親の変容と過程尺度評定値の変動との関係を検討する。最後に子どもについての社会成熟度診断検査、田中ビネー式知能検査そして担任教師による評定などの諸結果と過程尺度評定値との関係を検討する。以上の検討結果に基づいて、「研究仮説3」を検証する。

第3に、第2で述べた外部的基準による評定結果、成功度が高いと評定された事例に対する過程尺度評定値と成功度が低いと評定された事例に対する過程尺度評定値とを比較検討することによって、「研究仮説4」を検証する。

## 2 調査基準と評定尺度

調査基準・評定尺度	作成者	発行所
1 過程尺度	ロジャーズ	
2 クライアント範ちゅう	スナイダー	
3 田研式親子関係診断テスト(両親用)	品川不二郎他	日本文化科学社
4 矢田部ギルフォード性格検査(一般用)	矢田部達郎他	竹井機器工業株式会社
5 田研式社会成熟度診断検査	鈴木 清他	日本文化科学社
6 田中ビネー式知能検査	田中 寛一他	同 上
7 教育相談資料A(保護者記入用)	新潟県立教育研究所	同 左
8 教育相談資料B(学校記入用)	同 上	同 左

上の表はこの研究に用いられた調査基準や評定尺度である。次に、過程尺度の概略を紹介する。その他の調査基準や評定尺度については、「V」において研究結果を記述するさいに簡単に紹介する。

## 3 過程尺度の概要

過程尺度には、七つのストランズと七つのステージがあることは、すでに述べたとおりであるが、ここでは紙面のつごうで、1) ストランズ 2) 評定の実例 3) ステージの順に紹介する。

### 1) ストランズの概要

#### ア 感情と個人的意味づけ(feeling and personal meaning)

感情と個人的意味づけというのは、情緒的にいどられた経験と、それが個人に対してもっている意義とをさすものである。個人の経験は感情的な色彩を伴っているものであり、またその個人は、その感情が自分自身にどんな意義をもっているかを知覚している。したがって、感情と個人的意味づけとは、それらが意識的に否定されずに、真に自己のものとして体験されているかという度合に関するものである。

#### イ 体験の様式(manner of experiencing)

体験の様式とは新しい概念であり、ロジャーズは、「体験は、直接に与えられ、感じられるものであり、むしろ潜在的に意味をもつ(implicitly meaningful)ものであると考えられる。体験の様式とは、個人の経験しつつある(having experience)という感じをさすものである。…中略…個人が自らに対して「これほどのような体験なのだろうか」と自問するとき、顕在的な答(explicit answer)がまだはっきり概念化されないときでも、そこには常に、潜在的な答(implicit answer)があるものである。」(注12)と述べている。したがって、体験の様式というのは、人がこのような主観的な体験過程のなかにあるか、あるいはそれから非常に遠ざかっているかという度合をさすものである。

#### ウ 不一致の場合 (incongruence)

不一致とは、個人が今体験しつつあることと、それが彼の意識またはコミュニケーションのなかに表現されたものとの間に存在する矛盾をさしている。このような矛盾は、当人が直接に知ることとはできないものであり、それは観察されるものである。その反対は、個人の体験と、その意識のなかに象徴化あるいは概念化されたものとの一致である。

#### エ 自己の伝達 (communication of self)

自己の伝達とは、個人が受容的なふん囲気のなかで、自己を喜んで伝達しようとしているか、またそれができるかという度合とそのやり方に関するものである。

#### オ 体験が構成される様式 (personal constructs)

体験が構成される様式とは、個人がみずからの体験をどのように考え、どのような概念を構成するかということをもさすものである。したがって、体験が構成される様式とは、構成概念は個人によって創造されたものと考えず、固定的な事実と考えるか、またはそれは自らの体験に与えた意味づけに過ぎないかと考えるかという度合に関するものである。

#### カ 問題に対する関係 (relationship to problems)

問題に対する関係とは、その人自身の問題やその人自身が原因となって形成された問題を、彼自身がどのように考えるかということである。したがって、問題に対する関係とは、個人が自己の問題を認めず、それはまったく自己の外部にあると考え、自ら変わろうとする欲求がないか、それとも問題に対する自己の責任を感じないようになり、もっと建設的に考えるようになるかという度合に関するものである。

#### キ 関係のしかた (manner of relating to others)

関係のしかたとは、他人との関係のしかたをさすものであり、個人が他人との密接な関係をもつことを恐れて、それを避けようとするか、それとも彼が心を開いて他人との関係をむすび、他人に対する恐怖心や愛情や怒りなどの感情を自由に表現することができるかという度合に関するものである。

### 2) 評定の事例

カウンセリング標本単位を評定するにあたって、評定者は、ロジャーズの評定方法にしたがい、1.0から7.0までの7.0点評定尺度を用いた。カウンセリングの標本単位を厳密に過程尺度のある一つの段階に分類するという事は、困難なことが多い。というのは、一つの標本単位のなかのすべての発言内容が、同一の段階の特徴をあらわしているとはかぎらないからである。したがって、尺度上隣接する2つの段階の間を1.0等分し、標本単位の評定をもっと精密に実施できるようにした。したがって、第3段階の特徴が一つあり、また同時に第4段階の特徴が二つあるような標本単位は、その割合に応じて、3.7というように評定される。

次に、各段階の実例を紹介する。なお、カウンセリングにおいては、第7段階に属するような発言はほとんどみられない。(注12)(Oはクライアント、Tはカウンセラーをあらわす。)

#### 評定 事例

- 1.8 O あのね、どうしても必要な時でなければ、自分のことを話すなどということは、かなりばかげたことですよ。
- 2.0 T あなたがどうしてもここへやってきたのかお話ししてくだされば……

- 徴候としては……ただ……非常に憂うつだということです。
- 3.3 ○ 私のなかにはいりこんできたこの感情は、子どもとして思いたず感情にすぎなかったのです。
- 4.0 ○ 依存したくなるということは、いわば自分にあいそをつかしているということですから、がっかりしてしまうのです。
- 4.5 ○ 私が家を出て、母からはなれるということが、一番いいことだとわかっているんですが…そんなわけで、それができないのです。私たちみんなのために一番いいことなんですが、だからほんとは、問題は私のなかにあるのです。
- 5.0 ○ 私はやさしくて寛大な人間になりたいのですが、ほんとうのところは、そうではないのです。私はすぐ怒ってしまったり、人々にかみつきたくなるし、時には利己的であるように思えます。そして、なぜ私がそうでないように見せたがるのか、わからないのです。
- 5.5 ○ 私のなかの何か「私はこれ以上何をすてなければならぬのか、お前はすでに私から多くのものをとりあげた」と言っている。これは私に話しかけている私なのです。……しばいをやっている私に、ずつとろしろの方から話しかけている私なのです。それは今不平を述べています。「おまえは近寄りすぎている。もっと離れなさい」と。
- 6.0 ○ 私はまだこの力にびっくりしているのです。それはそのまま、私が感じているままなのです。

### 3) ステージ ( 評定段階 )

各ストランズの評定基準は、次のとおりである。

ステージ ストランズ	第 1 段 階	第 2 段 階	第 3 段 階
感情と個人的意味 づけ ( FPM )	<ul style="list-style-type: none"> <li>感情や個人的な意味について何も述べられない。</li> <li>何を話すべきかについて、まったく当惑している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>感情は、時には、自己の外部にあるものとして、自己のものでない過去の対象物として、非人称的な用語で述べられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己の過去の感情と個人的意味について多く述べられる。</li> <li>その感情は、悪いもの、異常なものとして描かれる。</li> </ul>
体験の様式 ( XEP )	<ul style="list-style-type: none"> <li>主観的な体験過程から非常に遠く、現在の自己の考えや感じが述べられないが、自己が動かされている外部的照合枠は過去時制で写實的に述べられることがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>主観的な体験過程からまだ離れており、生活のなかの現在の事象は過去のものとして合理化され概念化されるが、それに伴う自己の感情は述べられない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>体験過程は過去時制で表現される。しかし、そこで表現される自己の感情は、再体験されているかのように、生き生きしていることが多い。</li> </ul>
不一致の度合 ( INC )	<ul style="list-style-type: none"> <li>体験過程と意識との間に大きな矛盾があるが、それは意識されていない。見落とされた広い体験領域が残されている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>対象としての自己自身について矛盾した発言をするが、その発言が矛盾していることを、ほとんどはまったく意識していない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>特記すべきことはない。</li> </ul>
自己の伝達 ( SEL )	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己自身を、あるいは自己自身について伝達しがらない。</li> <li>伝達は、自己のまったく外部にある材料について行なわれる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己の根本的な問題と直接的な関係のない話題について述べられる。</li> <li>外面化された自己は、外部的環境・運命などの結果と考えられしかも否定的に評価される。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>対象としての自己、および自己に關係ある対象としての体験について、いっそう自由に表現される。</li> <li>自己に關係した過去の感情が述べられる。</li> </ul>
体験が構成される 様式 ( PC )	<ul style="list-style-type: none"> <li>個人的構成概念は、自己の体験に特別な意味づけを与えたものであることに気づかない。したがってそれは外部的な事実であって、変化しないものと考えられている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>特記すべきことはない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>個人的構成概念は、融通性のないものだが、時には構成概念であることに気づく。</li> <li>時には、過去の構成概念の妥当性について疑問をもちはじめめる。</li> </ul>
問題に対する関係 ( PRB )	<ul style="list-style-type: none"> <li>認識されている問題は1つも無い。</li> <li>変わりたいという気持ちもまったく無い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>何か問題があるということは、ある程度認めるが、それは自己の外部にあるものとみられ、それに対する責任は感じていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題は自己の外部よりも、むしろ内部にあることを認識しはじめめる。しかし、じゅうぶんに意識されていないといってよいであろう。</li> </ul>
関係のしかた ( REL )	<ul style="list-style-type: none"> <li>密接な関係にはいることは、危険だと感じている。</li> <li>治療者は、リードする人で、治療関係の責任をとる人とみられている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>何か話さなければならないという概念にとりつかれているようにみえるが、自分の力で自由に動けるような新しい場面であるとはみられていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>いっそう自由に表現されるが、それはあたかも、治療者を自己の悪い過去の観察者であるとともに、信頼できる腹心の友として受け容れたかのようにみえる。</li> </ul>

第 4 段 階	第 5 段 階	第 6 段 階	第 7 段 階
<ul style="list-style-type: none"> <li>自己の現在の感情や個人的意味が自由に述べられるが、強烈な感情は、自己の願望に反するものとして、または過去形で述べられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己の感情は、即時的に自由に表現され、自己のものと認められる。</li> <li>否定されてきた感情が意識されてくるが、恐怖・疑惑が伴う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>以前意識されなかった感情が、直接的に体験され受容される。</li> <li>この感情は、否定、恐怖、抵抗されるようなものではない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>新しい感情は、豊かに直接的に体験されると、この体験過程は、明確な照合点として用いられ、さらに深い意味がひきだされる。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>体験過程は、不本意ながら現在のものとして認め、表現する。その内部的照合は、大づかみなものであり、しばしば不明確な不快感の経験であるようにみえる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>体験過程は直接的、即時的に概念化され表明されるが、不安と恐怖を伴いやすい。しかし体験のなかには、その意味づけを深める照合点があると実感されているようだ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>以前否定された感情の体験は鮮明で直接的解放的である。</li> <li>現実生活のなかの隠された意味をみいだすために、体験過程が有効な照合点となっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>過去に即して現在を解釈するよりも、現在の体験過程に即して生きている。</li> <li>体験されたいろいろの照合点の分化は、鮮明で基本的なものである。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>現在の体験する自己と、より以前の段階で見出された古い対象としての自己との間の不一致が意識されるように思われる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>矛盾は人格の異なった側面に存在する態度として認識される。</li> <li>その矛盾の表明は、生き生きしており、ほんとうに体験されている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ある感情の体験過程をじゅうぶんに生きるその期間において、これまでの象徴化が不正確であったことに、はっきり気づく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>体験過程に含まれる意味を象徴化し、概念化することができるとつれて、不一致は最少限で一時的なものとなる。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>自己に関連した現在の感情がかなり伝達される。</li> <li>きわめて慎重であるが、現在における自分自身を発見しようとしていることが感じられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己に関連した現在の感情が自由に表明され、ますます受容され、自己のものとされる。</li> <li>自己が客体として知覚されることがいっそう少なくなる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己は感情の体験過程のなかに存在し、自己を対象として強く意識することはない。そこにある意識は、反射的なものであって、自己意識的なものではない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己は、主として、体験過程の反射的意識である。それは防衛されるべき構造でなくて豊かな、変化しつつある内的体験過程の意識である。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>体験はある意味をもつものとして解されてきたが、その意味は絶対のものでなく、またいつも外部的に妥当なものとはかぎらないと、ひん繁に気づくようになる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>構成概念は、ますます柔軟になる。構成概念に関する多くの新しい発見が行なわれ、そのような構成概念の妥当性を疑うようになる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>堅固な指標と思われた多くの個人的構成概念は、体験過程のある要素を解釈する方法にすぎないということが理解される。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>体験は、ころもにある意味をもつものとして解釈される。この意味は、さらにもっと深い体験過程に照らし合わせて再検討されたりする。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>問題に対する自己の責任が表明され、自分がその問題の原因を作っていることを理解されるようになる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分がその問題の原因を作っていることを気にしている。</li> <li>存在する問題に対して、明確な責任があると感ずる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題は、もはや本質的には対象物ではない。</li> <li>問題について話すことはまれであるが、問題のなかに生きている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題ということばは、体験過程がこの段階まで進んでくると、もはや特別の意味をもたなくなる。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>時々あえて他の者と感情的水準における関係をもとうとする。このことは、まったく新しい経験と感じられるかもしれない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>特記すべきことはない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>治療者との関係における過程において、大胆にも彼自身であろうと努める。それは、治療者が受容するであろうと信頼しているからである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>治療者や他人に対して、その関係における自己の直接的な体験に基づいて、自由に卒直に関係をもつことができる。</li> </ul>

### 3 評定の手続

#### 1) 過程尺度による評定手続

過程尺度によって評定するために、カウンセリングの全過程を、初期・中期・後期に分け、各期から1回分のカウンセリング記録をとりだし、それぞれの記録から1分単位で、11ないし12のカウンセリング標本を選択し、これを評定のための標本単位とした。標本単位の選択にあたって、それぞれのカウンセリング記録から、カウンセリング時間に応じて、3分ないし4分間隔をおいて機械的に選択した。たとえば、……1分単位……3分間隔……1分単位……3分間隔……というように。

評定は当研究所の2名の相談員によって実施された。各評定者は1分単位で選択されたカウンセリング標本単位の転写記録をランダムにとりだして評定した。その際それぞれの転写記録が何回目のカウンセリング記録から選択されたものかをあらわす手がかりを、できるだけとり除いた。

#### 2) クライアント範ちゅうによる分類手続

クライアントの発言を、クライアント範ちゅうによって分類するために、まづコブナー (Covner, B. J.) の観念——この観念は、クライアントの思考の主題または態度が明らかに変わったことが示されるものと定義されている。(注13)——によって、クライアント発言を分割して分類単位を作成し、ついでカウンセリングの全過程を時間的に5等分し、各分部ごとにそこに含まれる分類単位を、クライアント範ちゅうによって分類し、それらを集計して、ひん数・百分率を求めた。なお、クライアント範ちゅうは、すでに述べたようにスナイダーの範ちゅうを基本としたが、その中の「問題の叙述」(YSP)の範ちゅうは、シーマン (Seeman, J.) の態度範ちゅう (注14) を参考にして、「問題の叙述両向」(YSPa)、「問題の叙述、否定」(YSPn)、「問題の叙述、肯定」(YSPp)に分割した。しかし問題があらわれた場面や背景の説明的描写には、肯定・否定・両向のいずれの感情も認められない発言があったので、「問題の叙述、説明」(YSPe)を設けた。

#### 3) テスト・調査などによる評定手続

テスト名・調査名	第 1 回	第 2 回
・ 親子関係診断テスト ・ 矢田部ギルフォード性格検査 ・ 社会成熟度診断検査	Y・M両事例とも、受理面接時に、母親に家庭で記入し、次回の相談日に持参を依頼。	Y事例は、カウンセリング終結後、家庭に郵送し母親に記入を依頼。 M事例は、カウンセリング継続中であるが、母親に家庭で記入を依頼。
・ 田中ビネー式知能検査	Y児・M児に対して、第2回目の来所時に遊戯治療室で、テスターが実施。	Y児に対してはカウンセリング終結後学校で実施。M児に対しては遊戯治療室でテスターが実施。
・ 教育相談資料 A	Y・M両事例とも受理面接時に、受理面接者が聴取し記入。	実施せず。
・ 教育相談資料 B	Y・M両事例とも、学校に郵送し、学級担任教師に記入を依頼。	Y・M両事例とも、学校に郵送し、学級担任教師に記入を依頼。

テストや調査は、カウンセリングの初期ならびにカウンセリング後期（または終結後）に、それぞれ1回実施した。実施の手続の概略は、前ページの表に示したとおりである。なお、第1回目のテストや調査は、Y事例は7月に、M事例は8月に実施し、第2回目は両事例とも1月に実施した。

## V 研究結果

### 1 過程尺度による評定結果とその分析

#### 1) 過程尺度による評定結果

次ページの「表1」は、2名の評定者によるY・M両母親についての評定結果である。O・S・Mの各評定値の項目には、それぞれOカウセラーの評定値、Sカウセラーの評定値、O・S両カウセラーの平均評定値が記入されている。標本単位の項目の数字は、いずれも過程尺度による評定のために各回のカウンセリング記録から選択されたカウンセリング標本の単位をあらわし、数字が多くなるにしたがい、その標本単位は各回のカウンセリングの終わりに、より近い部分から選択されていることをあらわしている。なお、いずれの回においても、選択された標本単位数が11の場合、各回平均値や各位置平均値を算出するにさいして、第4番目の評定値と第8番目の評定値を除外してある。

O評定値とS評定値との間の相関係数（ $r$ ）は、ピアソンの相関法（注15）によって計算すれば、「表2」に示したとおりである。

表2

ストランズ 評定標本 相関係数		FPM	EXP	INC	SEL	PC	PRB	REL	平均
		転写資料	$r$	0.829	0.801	0.901	0.812	0.861	0.867

「表3」は藤土圭三氏の研究結果（注16）と高柳信子氏の研究結果（注17）とを示したものである。

表3

研究者		ストランズ 評定標本 相関係数		FPM	EXP	INC	SEL	PC	PRB	REL	平均
				藤土	転写資料	$r$	0.616	0.514	0.452	0.499	0.616
高柳	録音資料	$r$	0.886	0.917	0.950	0.863	0.939	0.875	0.843		
	録音資料	$r$	0.925	0.949	0.935	0.922	0.942	0.894	0.879		

藤土氏の研究と比べると、われわれの研究の相関係数が高いが、高柳氏の研究に比べると、やや低い。しかし教育や心理学において、一般に「 $\pm 0.7 \leq r \leq \pm 1.00$ であれば、高い相関がある。」（注18）と言われている。したがって、いずれのストランズにおいてもわれわれの評定値には、高い相関があり信頼度は高いと考える。

以上に述べたように、O評定値とS評定値との間には高い相関があるので、いずれの評定値を用いて研究をすすめてもよいと考えるが、ここでは、かたよりをより少なくするために、M評定値を用いて分析・考察を行なう。

表 1

事例 評定値	Y事例に関する評定値									M事例に関する評定値													
	O評定値			S評定値			M評定値			O評定値			S評定値			M評定値							
	評定値	各位置平均値	各回平均値	評定値	各位置平均値	各回平均値	評定値	各位置平均値	各回平均値	評定値	各位置平均値	各回平均値	評定値	各位置平均値	各回平均値	評定値	各位置平均値	各回平均値					
初期の回 (Y事例・第1回目)	1	3.1	3.2		3.6	3.4			3.4	3.5			3.4	3.7			3.3	3.6					
	2	3.9			3.3			3.6			3.5		3.6			3.5			3.6				
	3	3.6			3.3			3.5			3.7		3.2			3.7			3.5				
	4	3.2			3.3			3.7			3.7		3.7			4.1			3.7				
	5	3.8	4.2	4.1		4.2	4.0	3.8			4.0	4.1	3.9	4.0			4.6	3.8					
	6	4.3				4.0				4.2					4.2		3.9			3.9		3.8	
	7	4.6				3.8				4.2					4.2		3.9			4.0		3.8	
	8	3.7				3.8				4.1					4.2		4.1			3.8		3.9	
	9	4.2	4.5	4.0		4.1	4.0	4.0			4.2	4.3	4.3	4.3			4.1	4.2					
	10	4.8				4.0				4.4					4.3		4.3			4.1		4.2	
	11	4.6				4.0				4.3					4.4		4.2			4.1		4.2	
	12																4.4			4.2		4.3	
中期の回 (Y事例・第8回目)	1	3.0	4.2	4.3		3.0	4.2	4.2			3.0	4.3	4.6	5.0			4.3	4.4					
	2	3.9				4.8				4.4					4.3		4.4			4.6		4.4	
	3	5.6				5.2				5.4					4.9		4.7			5.0		4.8	
	4	3.3				3.8				4.6					4.6		4.6			5.0		4.9	
	5	4.6	5.2	4.3		4.6	4.6	4.2			5.3	4.9	4.3	5.0	5.0			4.8	4.6				
	6	5.8				4.8				4.8						4.9		4.7			5.0		4.5
	7	5.2				4.3				4.8						4.9		5.2			5.0		4.5
	8	3.9				3.8				4.6						4.6		5.1			4.8		4.5
	9	4.8	4.1	4.0		4.3	4.0	4.0			4.6	4.0	5.3	5.3			4.5	4.9					
	10	4.2				4.1				4.2					4.2		5.3			4.8		5.1	
	11	3.2				3.5				3.4					4.0		5.4			5.3		5.1	
	12																5.4			5.4		5.4	
後期の回 (Y事例・第15回目)	1	3.9	4.4	4.5		4.0	4.8	4.8			4.0	4.9	4.8	6.0	5.9			5.6	5.2				
	2	4.7				4.6				4.7						4.8		5.4			5.9		5.2
	3	5.1				4.8				5.0						4.8		5.8			6.0		5.4
	4	3.7				4.8				4.3						4.8		5.6			5.9		5.6
	5	4.7	5.1	4.8		4.6	4.7	4.8			4.7	4.9	4.8	6.0	5.9			5.5	5.7				
	6	5.1				4.3				4.7						4.8		6.0			5.9		5.7
	7	5.7				5.2				5.5						4.8		6.2			5.7		5.6
	8	4.9				4.6				4.7						4.8		6.2			5.6		5.6
	9	4.2	5.1	5.2		5.6	5.2	5.2			4.9	5.2	6.2	6.2			6.0	5.5					
	10	5.4				5.0				5.2					5.2		6.0			6.0		5.9	
	11	5.5				5.2				5.4					5.2		6.3			6.1		5.6	
	12	5.3				5.0				5.2					5.2		6.4			6.2		6.0	

2) 評定結果の個別的な統計的分析

ア 各回平均値の変動の分析

表4 検定結果については、危険率5%以下に❖、危険率1%以下に❖❖を付してある。(以下同じ)

事例	評定項目	位置	初期の回			中期の回			後期の回			備考	
			初	中	後	初	中	後	初	中	後	$X^2_{(df=3)}$	マンの検定
Y事例	各位置平均値		3.5	4.1	4.3	4.3	4.9	4.0	4.5	4.9	5.2		❖
	各回平均値		3.9			4.3			4.8				
M事例	各位置平均値		3.6	3.9	4.2	4.3	4.8	5.1	5.4	5.7	6.0		❖❖
	各回平均値		3.9			4.7			5.7				

「表4」は、この研究の直接対象となるM評定値のうちの各回平均値と各位置平均値についての一覧表である。「表4」に基づいて、カウンセリングの各回平均値の変動を検討すると、仮説で予測したとおりY・M両母親ともカウンセリング回数が重ねられるにつれて、各回平均値は高くなっている。しかしX<sup>2</sup>検定結果によれば、いずれの変動にも有意差は認められない。次にY母親の各回平均値の変動とM母親の各回平均値の変動とを比較すると、Y・M両母親とも同じ平均値から出発して、Y母親は0.9上昇し、M母親は1.8上昇している。したがって、M母親の変動は大きい、Y・M両母親の間には統計的に有意な差はなく、ふたりの平均値の変動傾向は、ほぼ類似した上昇傾向であるといえよう。

イ 各位置平均値の変動

「表4」によって、カウンセリングの各回ごとに、初・中・後の位置平均値の変動をみると、Y母親の中期の回のカウンセリングでは、中央の高い山型カーブをえがいているが、その他の回のカウンセリングにおいては、Y・M両母親とも、仮説で予測したとおり後半に進むにしたがって位置平均値は漸増している。この位置平均値の変動をカウンセリングの全過程(初期の回・中期の回・後期の回)をとおしてみると、マンの検定によれば、Y母親の変動には5パーセントの水準で、M母親の変動には1パーセントの水準で、有意な上昇傾向があると認められるが、X<sup>2</sup>検定結果をみるとこれらの位置平均値の上昇傾向は、顕著であるとは言えない。

次にY母親の位置平均値の変動とM母親の位置平均値の変動とを比較すると、M母親の変動が大きい、Y・M両母親の変動の間に統計的に有意な差は認められない。

3) 評定結果の要因分析

2) では、Y・M両母親を個別に統計的分析を行ない検討してあるが、ここでは、Y・M両母親をまとめ、「繰り返しのある要因分析」(注19)によって、総合的に統計的な分析検討をする。

表5

A	Y 事例				M 事例				合計
	初	中	後	小計	初	中	後	小計	
B 0									
初回	-11	-5	-3	-19	-10	-7	-4	-21	-40
中回	-3	3	-6	-6	-3	2	5	4	-2
後回	-1	3	6	8	-2	11	14	23	31
合計	-15	1	-3	-17	-15	6	15	6	-11

「表5」は要因分析の計算を簡単にするために、「表4」のなかのすべての各位置平均値を10倍し、さらに46を引いた数値が記入されている。

要因分析にあたって、Y・M両母親の個人差の要因をA、各回のカウンセリング別の要因をB、各回のカウンセリングにおける初・中・後の位置別の要因をCとする。

表6

	SS	f	V	$F_0$
A	29.38	1	29.38	14.89
B	420.78	2	210.39	113.90
C	175.44	2	87.72	44.50
A×C	28.78	2	14.39	14.39
B×C	47.56	4	11.89	11.89
A×B	25.45	2	12.72	12.72
R	7.90	4	1.97	1.97
T	735.28	17		

符号について(以下同じ)

SS 偏差平方和	C 位置別の要因
f 自由度	A×B AとBの相互作用
v 自由度1あたり	A×C AとCの相互作用 の偏差平方和
$F_0$ F検定	B×C BとCの相互作用
A 個人差の要因	R 誤差(A×B×Cも含む)
B 回数別の要因	T 総合計

## 2 クライアント範ちゅうによる分類結果とその分析

### 1) クライアント範ちゅうによる分類結果

次ページの「表7」は、クライアント範ちゅうによる分類結果である。この「表7」によって、カウンセリングの全過程におけるY・M両母親の変容の過程とその度合を明らかにするために、クライアント範ちゅうによって、分類されたY・M両母親の発言ひん数についての百分率が、第1分部から第5分部までの間で、どのような変動しているかを究明する。

### 2) 分類結果の個別的な統計的分析

#### ア 発言ひん数百分率の変動に関する事例別分析

「表7」に示した $X^2$ 検定結果を参考にして、Y・M両母親の発言ひん数百分率の変動傾向を個別にまた範ちゅう別に検討すると、次のようにまとめられる。

- ア) 「問題の叙述, 両向」(YSPa), 「問題の叙述, 肯定」(YSPp), 「理解と洞察」(YUI), 「小計2」(YUI+YDP)などの範ちゅうに属するY・M両母親の発言ひん数百分率は、だいたい一貫して漸増する傾向があり、しかもその変動に有意差が認められる。
- イ) 「問題の叙述, 否定」(YSPn)の範ちゅうに属するY・M両母親の発言ひん数百分率は、だいたい一貫して漸減する傾向があり、またその変動に有意差がある。
- ウ) 「問題の叙述, 説明」(YSPe), 「明瞭化の受容」(YAC), 「小計1」(YSP)などの範ちゅうに属するY・M両母親の発言ひん数百分率の変動には、一定の傾向がみられないが、

「表5」について、要因分析を行なった結果は、「表6」である。

この結果から、個人差(A)、カウンセリング回数別(B)、カウンセリング内の位置別(C)および個人差とカウンセリング内の位置別の相互作用(A×C)などが統計的に有意であるといえる。すなわち、個人差(A)については、Y・M両母親が個別に異なるカウンセリングの過程をたどっていることが明らかである。カウンセリング回数別(B)については、Y・M両母親ともカウンセリング回数を重ねるにつれて、各位置平均値が高くなることは明らかである。カウンセリング内の位置別(C)については、Y・M両母親とも、各回のカウンセリングにおいて前半から後半に進むにつれて、各位置平均値が高くなることは明らかである。個人差とカウンセリング内の位置別(A×C)については、位置平均値の変動のしかたは、母親によって、異なることは明らかである。

表 7

注 備考欄の  $X^2$  検定は、ひん数について実施した結果である。

事例	5等分部 ひん数%	1		2		3		4		5		合 計		備 考 $X^2$ 検定
		頻数	%											
Y	YSPe (問題の叙述, 説明)	77	38.8	110	35.4	54	23.1	67	29.1	69	32.0	377	31.7	***23.16
	YSPa (問題の叙述, 両向)	3	1.7	8	2.5	4	1.7	8	3.5	8	3.7	31	2.6	4.07
	YSPn (問題の叙述, 否定)	71	35.7	96	30.7	66	28.2	44	19.1	36	16.6	313	26.2	***35.96
	YSPp (問題の叙述, 肯定)	11	5.3	28	7.7	18	7.7	22	9.6	30	13.9	109	9.2	**10.86
	小計 (1) (YSP)	(162)	(81.5)	(242)	(60.7)	(142)	(60.7)	(141)	(61.3)	(143)	(66.2)	(830)	(69.7)	***45.31
	YUI (理解と洞察)	9	4.5	15	4.8	22	9.1	21	9.2	23	10.6	90	7.6	7.77
	YDP (計画の話し合い)	1	0.5	0	0	2	0.9	5	2.2	2	0.9	10	0.8	7.00
	小計 (2)	(10)	(5.0)	(15)	(4.8)	(24)	(10.3)	(26)	(11.4)	(25)	(11.5)	(100)	(8.4)	**10.10
	YAI (情報の要求)	0	0	3	1.0	6	2.6	2	0.8	5	2.3	16	1.3	
	YAIQ (質問に対する応答)	2	1.0	0	0	1	0.4	1	0.4	1	0.5	5	0.4	
専	YAC (明瞭化の受容)	10	5.0	43	13.9	43	18.3	38	16.5	15	7.0	149	12.6	***34.23
	YRC (明瞭化の拒否)	0	0	1	0.3	1	0.4	1	0.4	1	0.5	4	0.3	
	小計 (3)	(12)	(6.0)	(47)	(15.2)	(51)	(21.7)	(42)	(19.1)	(22)	(10.3)	(174)	(14.6)	
	YEC (面接の終了)	3	1.5	2	0.6	2	0.9	3	1.3	2	0.9	12	1.0	
	YES (関係の終結)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	YFD (社交的会話)	3	1.5	2	0.6	6	2.6	2	0.9	4	1.8	17	1.4	
	YNR (無関係な会話)	4	2.0	1	0.3	6	2.6	12	5.2	14	6.5	37	3.1	
	YUN (分類不可能)	5	2.5	3	1.0	3	1.2	4	1.7	6	2.8	21	1.7	
	小計 (4)	(15)	(7.5)	(8)	(2.5)	(17)	(7.3)	(21)	(9.1)	(26)	(12.0)	(87)	(7.2)	
	合計	199	100	312	100	234	100	230	100	251	100	1191	100	
M	YSPe (問題の叙述, 説明)	103	38.0	64	27.9	68	32.2	51	26.1	46	25.8	332	30.7	***28.88
	YSPa (問題の叙述, 両向)	8	2.9	8	3.5	10	4.7	17	8.7	9	5.2	52	4.8	5.48
	YSPn (問題の叙述, 否定)	83	30.5	73	31.8	55	26.0	43	21.9	31	18.0	285	26.4	***31.72
	YSPp (問題の叙述, 肯定)	11	4.0	18	7.9	23	10.8	19	9.7	21	12.2	92	8.5	4.58
	小計 (1) (YSP)	(205)	(75.4)	(163)	(71.1)	(156)	(73.7)	(130)	(66.4)	(107)	(62.2)	(761)	(70.4)	***35.84
	YUI (理解と洞察)	4	1.5	10	4.4	8	3.8	17	8.7	14	8.1	53	4.9	**9.74
	YDP (計画の話し合い)	1	0.4	0	0	2	0.9	2	1.0	2	1.2	7	0.6	2.54
	小計 (2)	(5)	(1.8)	(10)	(4.4)	(10)	(4.7)	(19)	(9.7)	(16)	(9.3)	(50)	(5.5)	**10.16
	YAI (情報の要求)	3	1.1	2	0.9	1	0.5	2	1.0	2	1.2	10	0.9	
	YAIQ (質問に対する応答)	2	0.7	0	0	0	0	1	0.5	0	0	3	0.3	
専	YAC (明瞭化の受容)	26	9.6	18	7.9	17	8.0	16	8.2	19	11.0	96	8.9	
	YRC (明瞭化の拒否)	1	0.4	1	0.4	2	0.9	0	0	0	0	4	0.4	
	小計 (3)	(32)	(11.8)	(21)	(9.2)	(20)	(9.4)	(19)	(9.7)	(21)	(12.2)	(113)	(10.5)	
	YEC (面接の終了)	3	1.1	3	1.3	2	0.9	4	2.0	3	1.7	15	1.4	
	YES (関係の終結)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	YFD (社交的会話)	3	1.1	2	0.9	4	1.9	1	0.5	2	1.2	12	1.1	
	YNR (無関係な会話)	6	2.2	5	2.2	7	3.3	4	2.0	11	6.4	33	3.1	
	YUN (分類不可能)	18	6.6	25	10.9	13	6.1	19	9.7	12	7.0	87	8.0	
	小計 (4)	(30)	(11.0)	(35)	(15.3)	(26)	(12.2)	(38)	(14.2)	(28)	(16.3)	(147)	(13.6)	
	合計	272	100	229	100	212	100	196	100	172	100	1081	100	

その変動に有意差が認められる。

したがって、Y母親の発言ひん数百分率の変動とM母親の発言ひん数百分率の変動とは、かなり類似していると思われる。すなわち、Y・M両母親ともカウンセリング回数が重ねられるにつれて、否定的感情の表現が減少し、肯定的な感情の表現が漸増してくるばかりでなく、子どもの問題に対する自己の責任を理解した表現や積極的な建設的な行動に関する表現が増大するという好ましい変容過程をたどっている。この変容過程は、スナイダーヤシーマンの研究結果(注20)とはほぼ一致しているが、YSP(小計1)の発言ひん数百分率に明瞭な減少傾向がみられないことは、彼らの研究結果と異なる点である。この点は、他の調査やテストによる評定結果と関連して検討しなくてはならない。

1 発言ひん数百分率の変動に関する事例相互間の関連の分析

表8

5等分事例 範ちゅう		5等分事例					マン	X <sup>2</sup> (df=1)		
		1	2	3	4	5				
ア)	YSPa	Y	1.7	2.5	1.7	3.5	3.7			
		M	2.9	3.5	4.7	8.7	5.2			
	YSPp	Y	3.5	8.9	7.7	9.6	13.9			
		M	4.0	7.9	10.8	9.7	12.2			
	YUI	Y	4.5	4.8	9.4	9.2	10.6			
		M	1.5	4.4	3.8	8.7	8.1			
	YUI	Y	5.0	4.8	10.3	11.4	11.5			
	YDP	M	1.8	4.4	4.7	9.7	9.3			
	イ)	YSPn	Y	35.7	30.7	28.2	19.1		16.6	9.57
			M	30.5	31.8	26.0	21.9		18.0	
ウ)	YSPe	Y	38.8	35.4	23.1	29.1	32.0			
		M	38.0	27.9	32.2	26.1	26.8			
	YSP	Y	81.5	77.5	60.7	61.3	66.2			
		M	75.4	71.1	73.7	66.4	62.2			
	YAC	Y	5.0	4.8	10.3	11.4	11.5			
		M	9.6	7.9	8.0	8.2	11.0			

ア)において、各範ちゅうごとにY・M両母親の発言ひん数百分率の変動を検討した結果、Y・M両母親の変動には、ア)、イ)、ウ)にまとめて述べたとおり、かなり類似した傾向があることがわかった。しかしY・M両母親の変動傾向を比較検討すると、どちらの変動がより顕著であるかということが問題となる。「表8」は、各範ちゅうごとに、Y母親の変動とM母親の変動とを比較分析した結果である。

「表8」に示したX<sup>2</sup>検定結果をみると、ア)に分類された「YSPa」、「YSPp」「YUI」ならびに「YUI+YDP」などのいずれの範ちゅうにおいても、Y母親の変動とM母親の変動との間には、有意な差は認められない。したがって、Y・M両母親の変動傾向は明らかに類似しており、共に下降傾向があると言えよう。しかしマンの検定によれば、「YSPa」や「YU

I+YDP」などの範ちゅうにおけるY母親の変動傾向と「YUI」の範ちゅうにおけるM母親の変動傾向には、統計的に有意な下降傾向はみられない。したがって、「YSPa」と「YUI+YDP」の範ちゅうでは、M母親の下降傾向は明瞭でしかも顕著であり、「YUI」の範ちゅうでは、Y母親の下降傾向が明瞭でしかも顕著であると言えるが、全体としてみると、Y・M両母親の変動傾向の間には本質的差異はないと考える。

イ)に分類された「YSPn」の範ちゅうでは、Y母親の変動とM母親の変動との間には、5パーセントの有意水準で差異が認められるが、マンの検定によれば、Y・M両母親の変動は、ともに有意な下降傾向を示している。したがって、Y・M両母親とも、カウンセリングが進行するにしたがい、否定的な感情表現は明瞭に減少するが、どちらかといえば、Y母親の減少傾向が著しい。しかしY・M両母親の変動傾向に本質的な差異はない。

ウ)に分類された「YSPe」、「YSP」ならびに「YAC」などの範ちゅうにおいても、Y母親の変動とM母親の変動との間には有意差はないが、マンの検定によれば、「YSP」の範ちゅうにおけるY母親の変動には、有意な下降傾向がみられる。この傾向は、すでに述べたとおり、スナイダーヤシーマンの研究結果と一致するものであり、この範ちゅうに関しては、M母親の変容が、より好ましい傾向にあると考えられる。

以上に述べたア), イ), ウ) の三つの傾向を総合的に分析検討するために、シーマンの治療指数に関する式(注21)を参考にし、次のような「問題解消指数」を算定する式を考えた。

$$\text{問題解消指数} = \frac{YSPp + YUI + YDP}{YSPn + YSPe + YSPa + YSPp + YUI + YDP} \times 100$$

この式は、否定的感情の表現(YSPn)の減少と肯定的感情(YSPp)、理解と洞察(YUI)計画の話し合い(YDP)などに関する表現の増加とを、カウンセリング過程におけるクライアントの治療的推移を示すものと仮定して作られているのであって、人格変容の度を評定する尺度ではない。

「表9」は、Y・M両母親についての問題解消指数の変動を示したものである。

表9

分部事例	1	2	3	4	5	X <sup>2</sup> (df=4)
Y	12.2	16.7	25.3	28.7	32.7	12.5
M	7.6	6.1	20.0	25.0	30.0	15.1

「表9」によれば、Y・M両母親ともカウンセリング回数が増えるに伴い、問題解消指数は上昇するが、Y母親の上昇傾向は5パーセントの水準で有意であるのに対し、M母親のそれは1パーセントの水準で有意である。したがって、M母親の問題解消の度は、Y母親の度よりも高く、M母親の人格変容の度が大きいと言える。なお、各分部ごとにY・M母親のそれよりも高いが、すでに述べたとおり、これはY母親の人格が、M母親の人格より、より建設的であることをあらわすものではない。

### 3 分類結果の要因分析

表11

B \ C	Y 事例						M 事例						合計
	1	2	3	4	5	小計	1	2	3	4	5	小計	
YSPe	62	95	39	52	54	302	88	49	53	36	31	257	559
YSPa	-12	-7	-11	-7	-7	-44	-7	-7	-5	2	-6	-23	-67
YSPn	56	81	51	29	21	238	68	58	40	28	16	210	448
YSPp	-4	13	3	7	15	34	-4	3	8	4	6	17	51
YUI	-6	0	7	6	8	15	-11	-5	-7	2	-1	-22	-7
YDP	-14	-15	-13	-10	-13	-65	-14	-15	-13	-13	-13	-68	-133
YAI	-15	-12	-9	-13	-10	-59	-12	-13	-14	-13	-13	-65	-124
YAQ	-13	-15	-14	-14	-14	-70	-13	-15	-15	-14	-15	-72	-142
YAC	-5	28	28	23	0	74	11	3	2	1	4	21	95
YRS	-15	-14	-14	-14	-14	-71	-14	-14	-13	-15	-15	-71	-142
YEC	-12	-13	-13	-12	-13	-63	-12	-12	-13	-11	-12	-60	-123
YES	-15	-15	-15	-15	-15	-75	-15	-15	-15	-15	-15	-75	-150
YNR	-11	-14	-9	-3	-1	-38	-9	-10	-8	-11	-4	-42	-80
YED	-12	-13	-9	-13	-11	-58	-12	-13	-11	-14	-13	-63	-121
YUN	-10	-12	-12	-11	-9	-54	3	0	-2	4	-3	12	-42
合計	-26	87	9	5	-9	65	47	4	-13	-29	-53	-44	22

Y・M両母親をまとめ、「繰り返しのある要因分析」によって、総合的な分析検討をする。

「表11」は要因分析の計算を簡単にするために、「表7」のなかのすべての発言ひん数から45を引いた数値が記入されている。

要因分析にあたってY・M両母親の個人差をA、各クライアント範ちゅう別の要因をB

表 1 2

	SS	f	V	F <sub>0</sub>
A	80.66	1	80.66	
B	66314.38	14	4736.74	***
C	873.98	4	218.49	**
A × B	1135.54	14	81.11	
B × C	5977.42	56	106.73	*
C × A	7.20	4	1.80	
R	3014.60	56	53.43	
T	77403.78	149		

各分部別の要因をCとする。

「表 1 1」について、要因分析を行なった結果は「表 1 2」である。

この結果によれば、クライアント範ちゅう別(B)各分部別(C), および範ちゅう別と各分部別の相互作用(B × C)などが統計的に有意である。すなわち、範ちゅう別(B)については、Y・M両母親の発言は、特定の範ちゅう、たとえば、「問題の叙述、説明」、「問題の叙述、否定」、「問題の叙述肯定」、「感情の明瞭化の受容」、「理解と洞察」などに集中し、しかもそのひん数は範ちゅうによつ

て著しく異なることは明瞭である。各分部(C)については、Y・M両母親ともカウンセリングが進行するにつれて、彼らの発言ひん数は著しく変動することは明らかである。範ちゅう別と分部別の相互作用(B × C)については、範ちゅうを基本にしてみると、いずれの範ちゅうにおいても、カウンセリング回数が重ねられるにつれて、Y・M両母親の発言ひん数は明らかに変動する。しかしその変動には漸増の傾向があるか、それとも漸減の傾向があるかなどについては、それぞれの範ちゅうによって異なっていると言えよう。分部を基本にしてみると、いずれの分部においても、Y・M両母親の発言は一様でなく、特定の範ちゅうに集中し、しかもそのひん数は範ちゅうによつて著しく異なることは明らかである。

### 3 親子関係診断テスト結果

#### 1) 親子関係診断テスト結果

表 1 4

類 型	事例 回	Y 事 例						M 事 例					
		粗 点			パーセントイル			粗 点			パーセントイル		
		1回	2回	X <sup>2</sup> (df=1)	1回	2回	X <sup>2</sup> (df=1)	1回	2回	X <sup>2</sup> (df=1)	1回	2回	X <sup>2</sup> (df=1)
1	消極的拒否	14	15		5	15	** 4.1	10	15		0	15	*** 13.1
2	積極的拒否	14	18		20	75	*** 31.8	10	13		5	10	
3	厳 格	12	10		25	10	** 6.4	8	12		5	10	
4	期 待	13	13		30	30		9	13		5	30	** 8.9
5	干 渉	9	11		5	15	** 4.1	6	10		0	10	* 4.1
6	不 安	5	11		0	25	*** 2.48	5	10		0	20	*** 29.2
7	溺 愛	19	18		70	50		16	16		25	25	
8	盲 従	15	18		40	85	*** 18.0	12	15		10	40	*** 18.0
9	矛 盾	17	16		45	30		14	17		15	45	*** 15.0
10	不 一 致	15	15		25	25		15	19		25	80	*** 14.3
X <sup>2</sup> (df=9)					*** 61.8						*** 138.9		

「表14」は親子関係診断テスト結果である。

このテストは、親が子どもを養育する態度を評定する尺度で、親自身による自己評定用（両親用）と子どもによる親の態度の評定用（児童・生徒用）の2種類がある。この研究には、両親用が使用されている。

このテストで評定される親の態度は、「表14」の類型の項目に記されている10の態度である。

各態度類型ごとの得点（粗点）は、パーセンタイルに換算される。このテストの評定基準によれば、20パーセンタイル以下は危険地帯、20から40パーセンタイルまでは準危険地帯、50パーセンタイル以上は普通と評定されるが、どの段階においても、パーセンタイルが高くなれば、親の養育態度が好ましい方向に変容したことを意味し、またその値が高ければ高い程、その養育態度が好ましいことをあらわしている。

## 2) テスト結果の個別的な統計的分析

### ア 養育態度の変容に関する事例別の分析

「表14」によって、個別に第1回目のテスト結果と第2回目のテスト結果とを比較し、Y・M両母親の養育態度が、それぞれどのように変容したかを検討する。

養育態度に、好ましい変容が生じた類型は、Y母親では、消極的拒否・積極的拒否・干渉・不安・盲従などの5類型であり、M母親では、Y母親の場合に述べた5類型のほか、厳格・期待・矛盾・不一致など4類型がある。これらの諸類型における変容の具合について、パーセンタイルを用いて $\chi^2$ 検定を実施してみると、Y・M両母親とも\*印の付してある類型に有意な差異が認められる。したがってY母親は、消極的拒否・積極的拒否・干渉・盲従などの類型において、養育態度に好ましい変容が生じたことは明らかであり、M母親は、消極的拒否・期待・干渉・不安・盲従・矛盾・不一致などの類型において、養育態度に好ましい変容が生じたことは明瞭である。

母親の養育態度に変容がみられない類型は、Y母親では期待・不一致であり、M母親では溺愛である。

母親の養育態度に、好ましくない変容が生じた類型は、Y母親には、厳格・溺愛・矛盾などの3類型があるが、M母親には1つもない。

以上のような各類型別の比較検討とともに、第1回目のテスト結果と第2回目のテスト結果とを、 $\chi^2$ 検定によって、事例別に総合的な比較分析を実施してみると、「表14」に示したとおり、Y・M両母親の養育態度の変容には有意差が認められる。

したがって、Y・M両母親とも、カウンセリング初期の態度とカウンセリング後期の態度との間には差異があることは明らかである。しかしY・M両母親の養育態度の変容の方向は、かならずしも一致していない。というのは、M母親の養育態度は、全体として、好ましい方向に変容しており、しかもその変容は著しいが、これに反してY母親の養育態度は、すべての類型において、好ましい方向に変容していないからである。しかし好ましい変容が生じた態度類型数は、好ましくない変容が生じた態度類型数より多く、しかも前者の類型における変容の具合が大きい。したがって、Y母親の養育態度もまた、どちらかと言えば、好ましい方向に変容したと考えられる。

### イ 養育態度の変化に関する事例相互間の関連の分析

「表14」により、Y・M両母親の養育態度を比較検討し、どちらの母親の養育態度に顕著な変容が生じたか、またどちらの母親の養育態度がより好ましいかという問題を追究する。

Y・M両母親についての第1回目のテスト結果をみると、不安の類型を除くと、他のすべての類型に

においてY母親の養育態度は、M母親の養育態度より好ましいと言える。このY・M両母親の養育態度の間にある差異を、総合的に比較するために、パーセンタイルを用いて、 $X^2$  値を計算すると、 $X^2 = 28.56 (df=9)$ で、 $P < 0.01$ となり、1パーセントの水準で有意であることがわかる。したがって、カウンセリング初期においては、Y母親の養育態度はM母親の養育態度より、明らかに好ましいと言えるが、これは、このテストの評定項目や評定基準に基づいて評定した結果であって、Y母親がすべての点においてM母親よりすぐれていることをあらわすものではないことは当然である。

次にY・M両母親についての第2回目のテスト結果をみると、積極的拒否・干渉・不安・溺愛・盲従などの類型では、Y母親の養育態度はM母親の養育態度よりすぐれているが、厳格・矛盾・不一致などの類型では劣っている。このY・M両母親の養育態度の間にある差異を、総合的に検討するために、第1回目のテスト結果と同様に、パーセンタイルを用いて $X^2$  値を計算すると、 $X^2 = 13.891 (df=9)$ で、 $P < 0.01$ となり、やはり1パーセントの水準で有意であることがわかる。したがって、カウンセリング後期においても、Y母親の養育態度とM母親の養育態度との間には差異があることは明らかであるが、どちらの態度が好ましいかということを判定することはむずかしい。しかしY母親に、より好ましい態度類型が多く、また全類型についての平均パーセンタイルもY母親の方が高い。したがって、どちらかと言えば、Y母親の養育態度が好ましいと言えるからしれない。

Y・M両母親の養育態度の変容の度合については、すでにAにおいて述べたとおり、いずれの母親の変容にも、統計的に有意な差異が認められ、変容が生じたことは明らかであるが、しかしY母親の養育態度の変容のなかには、好ましくない方向に向かうものがある。したがって、好ましい方向への変容の度合はM母親の方が大きいと言える。この点について、さらに深く検討するために、好ましい変容が生じた類型だけをとりだして、 $X^2$  検定を実施してみると、 $X^2 = 6.14 (df=7)$ で有意差は認められない。したがって、カウンセリングが進むにつれて、Y母親の養育態度には、統計的には有意ではないが、好ましい変容と好ましくない変容とが同時に生じていると言える。

### 3) テスト結果の要因分析

表 15

A	C (類型)		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	合計
	Y	M											
事例	1 回目	B	1	1	-1	0	-4	-8	6	2	4	2	3
	2 回目		2	5	-3	0	-2	-2	5	5	3	2	15
	小 計		3	6	-4	0	-6	-10	11	7	7	4	18
事例	1 回目		-3	-3	-5	-4	-7	-8	3	-1	1	2	-25
	2 回目		2	0	-1	0	-3	-3	3	2	4	6	10
	小 計		-1	-3	-6	-4	-10	-11	6	1	5	8	-15
合 計			2	3	-10	-4	-16	-21	17	8	12	12	3

H・S両母親をまとめ「繰り返しのある要因分析」によって、総合的に統計的な分析検討する。

「表15」には、要因分析の計算を簡単にするために、「表14」の親子関係診断テストのすべての粗点から13を引いた

数値が記入されている。

要因分析にあたって、Y・S両母親の個人差の要因をA、テストの各回別の要因をB、養育態度の類型別の要因をCとする。

「表16」は「表15」について、要因分析を行なった結果である。この結果によれば、個人別(A)、テストの回別(B)、養育態度の類型別(C)、および個人とテストの回別(A×B)など

表 1 6

	SS	f	V	F <sub>0</sub>
A	27.22	1	27.22	✱✱ 25.7
C	364.03	9	40.44	✱✱✱
B	55.22	1	55.22	✱✱✱
A×B	13.68	1	13.68	✱✱✱ 12.9
B×C	28.03	9	3.13	2.9
A×C	29.03	9	3.22	3.0
R	9.57	9	1.06	
T	526.78	39		

テスト結果を比較しても、Y 母親の養育態度と M 母親の養育態度との間には明瞭な差異が認められる。

「表 17」は「表 14」の親子関係診断テストのすべてのパーセンタイルを、このテストの評定基準にしたがって、-1 (0~20パーセンタイル), 0 (21~40パーセンタイル), +1 (50~99パーセンタイル) に換算して要因分析を行った結果である。この結果によれば、類型別 (C) だけが統計的に有意である。

#### 4 矢田部ギルフォード性格検査結果とその分析

##### 1) 矢田部ギルフォード性格検査結果

表 1 8

		性格特徴 テスト下位													X <sup>2</sup> (df=11)
		D	C	I	N	O	C <sub>0</sub>	A <sub>G</sub>	G	R	T	A	S		
Y 事 例	粗	1	5	1	3	3	4	9	17	14	14	2	5	5	3.95
	点	2	4	8	3	1	3	10	13	10	15	2	7	4	
	標	1	2	3	2	2	2	4	5	4	4	1	2	2	X <sup>2</sup> (df)
	準	2	2	3	2	1	2	4	4	3	4	1	2	2	
	点	2													
M 事 例	粗	1	18	16	16	19	6	13	12	11	9	14	16	8	2.24
	点	2	13	14	17	15	7	12	8	7	8	12	17	15	
	標	1	4	4	4	5	3	4	3	3	3	3	4	3	X <sup>2</sup> (df)
	準	2	3	4	4	4	3	4	2	2	3	2	4	4	
	点	2													

「表 18」は、矢田部ギルフォード性格検査結果である。この表に記してある符号は、この検査で測定される性格特徴をあらわしている。これらの符号の内容や数値の意味は、「表 19」の矢田部ギルフォード性格検査プロフィールを参照されたい。

は統計的に有意である。すなわち、個人別 (A) によれば、Y・M 両母親の養育態度には、カウンセリングが進行するにしたいが、それぞれ個別に異なる変容が生じたことは明らかである。テストの回別 (B) によれば、Y・M 両母親とも、養育態度は、カウンセリング後期にいたると、その前期と比較して、変容が生じたことは明瞭である。類型別 (C) によれば、Y・M 両母親とも養育態度は、すべての類型において一様ではなく、好ましい態度もあれば好ましくない態度もあり、類型によって異なっている。個人と回別 (A×B) によれば、いずれの回の

表 1 7

	SS	f	V	F <sub>0</sub>
A	1.22	1	1.22	3.60
C	12.55	9	1.39	✱ 4.10
B	1.22	1	1.22	3.60
A×B	0.64	1	0.64	1.88
B×C	2.51	9	0.27	
A×C	1.51	9	0.16	
R	3.13	9	0.34	
T	22.78	39		

表 19

性格型	性格特徴	ゴシック数字は標準点, その他の数字は標準点算定基準					性格特徴	性格型
情緒的安定	抑うつ性小 D	1. 0~3	2. 4~8	3. 9~15	4. 16~18	5. 19~20	D 抑うつ性大	情緒不安定
	気分の変化小 C	1. 0~2	2. 3~7	3. 8~13	4. 14~17	5. 18~20	C 気分の変化大	
	劣等感小 I	1. 0~1	2. 2~5	3. 6~12	4. 13~17	5. 18~20	I 劣等感大	
	神経質でない N	1. 0~2	2. 3~7	3. 8~12	4. 13~17	5. 18~20	N 神経質	
社会的適応	客観的 O	1. 0~2	2. 3~5	3. 6~10	4. 11~14	5. 15~20	O 主観的	社会的不適応
	協調的 Co	1. 0~1	2. 2~4	3. 5~8	4. 9~13	5. 14~20	Co 非協調的	
非活動的	攻撃的でない Ag	1. 0~4	2. 5~8	3. 9~12	4. 13~16	5. 17~20	Ag 攻撃的	活動的
	非活動的 G	1. 0~2	2. 3~7	3. 8~13	4. 14~18	5. 19~20	G 活動的	
非衝動的	のんきでない R	1. 0~2	2. 3~6	3. 7~11	4. 12~16	5. 17~20	R のんき	衝動的
	思考的内向 T	5. 19~20	4. 15~18	3. 10~14	2. 5~9	1. 0~4	T 思考的外向	
内省的	服従的 A	5. 20	4. 16~19	3. 9~15	2. 3~8	1. 0~2	A 支配性大	主導権を握る
	社会的内向 S	5. 18~0	4. 13~17	3. 7~12	2. 2~6	1. 0~1	S 社会的外向	

2) 検査結果の個別的な統計的分析

ア 性格特徴の変容に関する事例別の分析

「表 18」により、個別に第 1 回目の検査結果と第 2 回目の検査結果とを比較し、Y・M 両母親の性格特徴が、それぞれどのように変容したかを検討する。

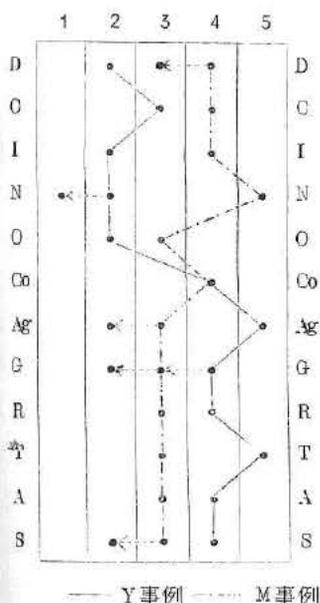
Y 母親について、各性格特徴別に粗点の変動を検討してみると、抑うつ性 (D)・気分の変化 (C)・神経質 (N)・主観的 (O)・非協調的 (Co)・攻撃的 (Ag)・活動的 (G)・支配性 (A) などの性格特徴では、それぞれの特徴が減少傾向にあるが、のんき (R)・社会的外向 (S) などの性格特徴では、それぞれの特徴が増大傾向にある。これらの性格特徴別の変容をまとめて総合的にみると、Y 母親は、カウンセリング後期にいたると、前期よりは、情緒的に安定し、社会的適応性が増し、非活動的になっていると言える。しかしこのような変容は統計的に有意なものでないことは「表 18」に示したとおりである。

M 母親について、各性格特徴別に粗点の変動を検討してみると、抑うつ性 (D)・気分の変化 (C)・神経質 (N)・非協調性 (Co)・攻撃的 (Ag)・活動的 (G)・のんき (R)・支配性 (A)・社会的外向 (S) などの性格特徴では、それぞれの特徴が減少傾向にあるが、劣等感 (I)・主観的 (O)・思考的外向 (T) などの性格特徴では、それぞれの特徴が増加傾向にある。これらの性格特徴別の変容をまとめて総合的にみると、M 母親は、カウンセリング後期にいたると、前期よりは、情緒的に安定し、社会的適応性がまし、非活動的・非主導的・非行動的になっていると言える。しかしこのような変容は統計的に有意でないことは Y 母親と同様である。

以上の分析から、Y・M 両母親には、なにかしら共通した変容傾向があるといえよう。共通した変容傾向とは、両母親の変容の方向が、プロフィールによって言えば、左寄りの傾向があるということである。すなわち、情緒的安定・社会的適応・非活動的・非衝動的・非主導的な方向に向かう変容傾向がわずかではあるが認められるということである。

イ 性格特徴の変容に関する事例相互間の関連的分析

図1



「表18」により、Y・M両母親の性格特徴を比較検討し、どちらの母親の性格特徴が著しく変容したか、またどちらの母親の性格特徴が、より望ましいかという問題を追究する。

「図1」は「表18」のなかのすべての標準点を用いて作成されたY・M両母親のプロフィールである。なお、折れ線グラフは、第1回目の検査結果をあらわしており、点線で示した矢印は、第2回目のテスト結果で、それぞれ第1回目の結果からの変容の方向と量をあらわしている。

第1回目のテスト結果によれば、Y母親の性格型は、左上から右下がりの「安定積極型」であり、M母親の性格型は、右上から左下中央さがりの「不安定・平均型」(注22)である。この両母親の性格特徴はもちろん全体としてみた性格型も、異なっていることは「図1」からも判断できようが、 $\chi^2$ 検定によれば、 $\chi^2 = 3.315$  (df=11)で、1パーセントの水準で有意差があり、明らかに相違している。これらの性格型や性格特徴のうち、どちらが好ましいかを判定することは非常にむずかしい問題である。というのは、この

ような問題は、個人の価値観にかかわる問題であり、個人個人異なると考えられるからである。したがって、ここではどちらの性格型や性格特徴が望ましいかという問題について結論をくたさず、事実を述べるにとどめる。

次にY・M両母親の第2回目のテスト結果を、プロフィールによってみれば、左寄りの変動を示しているが、この変動は、すでに述べたとおり統計的に有意ではない。したがって、カウンセリング後期におけるY・M両母親の性格型も、それぞれ「安定積極型」、「不安定・平均型」といえる。

Y・M両母親の性格特徴の変容の度合を比較すると、どちらの母親の変容が著しいかという問題については、「図1」のプロフィールや「表18」の粗点によって比較検討すると、いずれもM母親に生じた変容が大であることがわかる。しかしY・M両母親の変容は、いずれも統計的に有意ではないことを考慮して考察しなければならない。

5) 検査結果の要因分析

表20

A/B	C												計	
	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S		
Y	1	-5	1	-7	-7	-6	-1	7	4	4	-8	-5	-5	-28
事	2	-6	-2	-7	-9	-7	0	3	0	5	-8	-3	-6	-40
例	計	-11	-1	-14	-16	-13	-1	10	4	9	-16	-8	-11	-68
M	1	8	6	6	9	-4	3	2	1	-1	4	6	-2	38
事	2	3	4	7	6	-3	2	-2	-3	-2	2	7	5	26
例	計	11	10	13	15	-7	5	0	-2	-3	6	13	3	64
総	計	0	9	-1	-1	-20	4	10	-2	6	-10	5	8	-4

Y・M両母親をまとめ、「繰り返しのある要因分析」によって、総合的に統計的な分析検討する。

「表20」には、要因分析を簡単にするために、「表18」のうちのすべての粗点から10を引いた数値が記入されている。

要因分析にあたって、Y・M両母親の個人差の要因をA、検査の

各国別の要因をB、性格特徴別の要因をCとする。



合は、その年齢以下であることをあらわしている。第二部基本的習慣の項の記号A, B, Cは、それぞれすぐれている、ふつう、おぐれているということを意味し、○印が付されている記号が、それぞれの子どもに対する評定値である。

## 2) 検査結果の個別的な統計的分析

### ア 社会成熟度の変容に関する事例別の分析

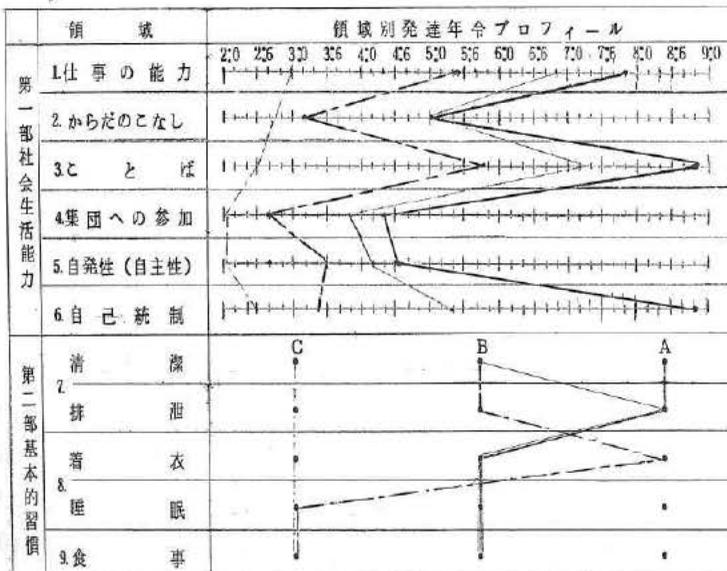
「表22」により、個別に第1回目の検査結果と第2回目の検査結果とを比較し、Y児・M児の社会成熟度が、それぞれどのように変容したかを検討する。

Y児の社会成熟度の変容の具合を究明するために、各領域別に粗点の変動を検討してみると、仕事の能力・ことば・集団への参加・自発性・自己統制・清潔などの6領域では、粗点が増加しているが、その他の領域では変動がみられない。以上の粗点の変動を領域別にみても、総合的にみても、そこには統計的に有意な差異は認められない。しかし社会成熟度指数をみると、第1回目の指数は73、第2回目の指数は79で、Y児の社会成熟度は、「劣の段階」から「中の下の段階」へ上昇している。すなわちY児の基本的習慣や社会生活能力の発達は、カウンセリング回数が重ねられるにしたがい、促進されたといえよう。

次にM児の社会成熟度の変容の具合を検討すると、すべての領域で粗点が増加しているばかりでなく仕事の能力・ことば・集団への参加・自発性などの領域での変動は、統計的に有意である。また第1回目の検査結果と第2回目の検査結果とを、全体として比較してみると、この間にみられる変動は、「表22」に示したとおり統計的に有意である。この変動を社会成熟度指数で調べると、第1回目の指数は粗点が低く算出不能であるが、第2回目の指数は37である。したがって、どちらの指数も「劣の段階」にあるが、M児の基本的習慣や社会生活能力の発達は、カウンセリング回数が重ねられるにつれて、著しく促進されたことは明らかである。

### イ 社会成熟度の変容に関する事例相互間の関連の分析

図2



第1回目のテスト結果 Y児—— M児——  
第2回目のテスト結果 Y児—— M児——

「表22」により、Y児とM児の社会成熟度を比較検討し、どちらの子どもの社会成熟度の変容が著しいか、またどちらの子どもの社会成熟度が高いかという問題を究明する。

「図2」は、Y児とM児との比較検討を容易にするために、「表22」に基づいて作成されたものである。なお第1回の検査結果ではM児の粗点が低く彼の発達年齢算定不能な領域があるが、この場合は発達年齢換

算表のなかの最少年令を、かりに彼の発達年令として記してある。

「図 2」によって、Y児とM児についての第 1 回目の検査結果を比較すると、Y児はM児より 8 か月年下であるが、すべての領域において、Y児の社会成熟度が高い。しかもこのふたりの子どもの社会成熟度の差異は、 $\chi^2$  検定によれば、 $\chi^2=21.56$  で、1 パーセントの水準で有意である。

次にY児とM児の第 2 回目の検査結果をみると、着衣の領域を除けば、Y児の社会成熟度はM児の社会成熟度よりも高い。このふたりの子どもの社会成熟度の差異は、 $\chi^2$  検定によれば、 $\chi^2=9.58$  で、5 パーセントの水準で有意である。したがって、カウンセリング前期においても、カウンセリング後期においてもY児の社会成熟度が高いことは明らかである。

次に変容の割合について比較すると、Y児とM児とではどちらが大きいかという問題は、「図 2」のプロフィールから、M児の変容の割合が大きいことはわかるが、この点については、すでにアで述べたとおり、Y児の変容は統計的に有意でないのに対して、M児の変容は 1 パーセントの水準で有意であることから、M児の変容の大きいことは明らかである。

### 3) 検査結果の要因分析

表 2 3

回	領域								合計						合計
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計	
Y	1 回目	-9	7	6	9	2	3	5	23	0	2	0	0	8	10
	2 回目	-8	8	6	10	3	4	9	32	1	2	0	0	8	11
見小	計	-17	15	12	19	5	7	14	55	1	4	0	0	16	21
M	1 回目	-9	-7	-1	-5	-9	-7	-8	-46	-5	-4	-4	-3	4	-12
	2 回目	-8	4	1	7	-3	1	-2	0	0	1	2	-1	7	9
見小	計	-17	-3	0	2	-12	-6	-10	-46	-5	-3	-2	-4	11	-3
合	計	-34	12	12	21	-7	1	4	9	-4	1	-2	-4	27	18

表 2 4

Y児・M児をまとめ、「繰り返しのある要因分析」によって、総合的に統計的な分析検討をする。要因分析にあたって、社会成熟度を、この検査の分類にしたがって、社会生活能力と基本的習慣の 2 つに分け、それぞれ別個に分析する。

要因分析の計算を簡単にするために、「表 2 2」のうちの第一部の粗点から 10 を引いた数値が「表 2 3」に、「表 2 2」のうちの第二部の粗点から 8 を引いた数値が「表 2 4」に記入されている。この二つの表を分析するにあたって、Y児・M児の個人差の要因を A、検査の各回の要因を B、社会成熟度の各領域別の要因を C とする。

「表 2 5」、「表 2 6」は、それぞれ「表 2 3」、「表 2 4」について要因分析を行なった結果である。

表 2 5

	SS	f	V	F <sub>0</sub>
A	364.32	1	364.32	59.6
B	108.03	1	108.03	17.6
C	484.86	6	70.71	11.5
A × B	48.90	1	48.90	7.97
B × C	29.73	6	4.96	
A × C	83.43	6	12.23	1.99
R	36.84	6	6.14	
T	1146.11	27		

表 2 6

	SS	f	V	F <sub>0</sub>
	28.80	1	28.80	
	24.20	1	24.20	
	175.05	4	43.76	
	20.20	1	20.20	
	3.55	4	0.88	
	3.95	4	0.98	
	2.05	4	0.51	
	257.80	19		

この結果によれば社会生活能力と基本的習慣との両分野に共通に、個人別(A)テストの回別(B)領域別(C)および個人別とテストの回

別の相互作用 (A×) などは統計的に有意であることがわかる。すなわち、個人別 (A) によれば、カウンセリングの進捗に伴って、社会成熟度が発達する過程は子どもによって異なることは明らかである。テストの回別 ( ) によれば、カウンセリング後期における Y 児と M 児の社会成熟度は、カウンセリング前期のそれよりも高いことは明瞭である。したがって、Y 児と M 児の社会成熟度の発達が促進されたことは明らかである。領域別 (C) によれば、Y 児と M 児の社会成熟度は、すべての領域において一様に発達しているものではなく、それぞれの領域ごとに発達の程度は異なっていることは明らかである。個人別と回別 (A×B) によれば、いずれの回の検査結果をみても、Y 児の社会成熟度と M 児の社会成熟度は異なっていることは明らかである。したがって、Y 児の社会成熟度は、M 児の社会成熟度より高いことは明瞭である。

## 6 田中ビネー式知能検査結果

表 27

事例	回	第 1 回目	第 2 回目
Y 児		129	139
M 児		86	99

「表 27」は、田中ビネー式知能検査結果を I.Q. で示したものである。一般に知能といわれているものは、知的な行動あるいは作業を可能にする知的要因のすべてを含めているが、知的行動あるいは作業となると、情意の影響をみのがすことができない。(注 23)。たとえば

かりに記憶がよく豊富な知識をもっており、思考判断がたしかであり、またはものの関係をは握するすぐれた可能性をもっている人がいたとしても、その人の情意になんらかの問題があって、もっている可能性がじゅうぶんにあらわれてこない場合、その人の現実の行動は見通しのきかないものであり、また知能検査でも誤りをおかすということになる。このような場合、知能がすぐれているということにはならない。知的にすぐれた行動をさせる可能性は、記憶・思考・判断・関係を抽出する力などのほかに、それらをその場その場の現実の事態に適應して動かせることのできる情意が健全でなければならぬ。このように知能を情意の影響を含んだ人格全体の適應の問題としてみると、Y 児と M 児の知能指数がそれぞれ 10, 13 上昇したことは、なにかしらの建設的人格変容が生じたことをあらわすのではないかと考えられる。

## 7 学級担任教師の評定と所見

### 1) 学業成績

表 28

事例 科目	Y 児			M 児		
	1	2	2 学期の所見	1	2	2 学期の所見
国語	3	3	読解力がのびてきた	2	3	やや読解力がついてきた
社会	3	3		2	2	
算数	3	4	計算力がついてきた	1	2	2 位数の加減ができるようになった
理科	3	4		3	3	年鑑・図鑑等を興味をもって見るようになった
音楽	3	3	正しい音程で歌える	1	1	
区画工作	3	3		2	2	自分ひとりの力では、まだ作品は完成できない
体育	3	3		1	2	みんなといっしょにボール運動、リレー競技ができるようになった

「表 2 8」は、Y児とM児のそれぞれの担任教師から返送された教育相談資料 B に記載されていた学業成績に関する評価と所見である。評価はいずれも 5 段階評価で、数値が高くなるほど成績がよいことをあらわしている。なお、評価の項目で斜線の引いてあるところは、評価が行なわれなかったことをあらわしている。

この表の評価点によれば、Y児は 1 科目において 1 点、M児は 3 科目において 3 点向上している。また所見によると、M児も Y児も、評価点の変動はないが、かなり力がついてきた科目がある。したがって、Y児も M児も成績は向上してきたと思われるが、進歩の度合を比較すると、M児が高いと考えられる。

## 2) 生活態度

Y児とM児の生活態度がどのように変わってきたかという問題については、それぞれの担任教師からの第 2 回目の報告を中心にして次に述べる。

### ア Y児の生活態度

- ・ 友だちとけんかすることが少なくなってきたが、3 学期はじめの交友調査によれば、Y児がきらいだという同級生が 1 6 人いる。その理由は、いやなことをするというものが多い。
- ・ 教室で奇声を発することがなくなったばかりでなく、教室でさわいんだり、横をむいたりすることが少なくなり落ちついてきた。
- ・ 友だちがほしいと熱望しているが、まだ友だちがあまりできず、ひとり遊びをしていることが多いが、1 学期と比較して、だんだん友だちとの関係をうまくもてるようになってきたようだ。
- ・ 学習時間においては、根気が続かずあきっぽいのが、宿題はきちんとしてくる。

### イ M児の生活態度

- ・ 今までは、他の子どもにからかわれたりすると、発作的にかみついたり、物を投げつけたりしたがこのごろはだまって、しくしく泣くようになった。乱暴がおさまってきた。
- ・ 学習も以前より落ちついてやるようになり、思考力も相当のびてきた。
- ・ 善悪の判断もしたいにできるようになり、始業におくれたりすると、担任が話しかけるまで教室の入口に立ってやることがあった。悪いことをした時、反省の色がうかがえるようになった。
- ・ 学習時間中に、挙手して発表はしないが、内容をつかんだ答を言うようになったし、友だちに対する話し方にも柔らかみがでてきた。
- ・ 小便をわざともらすようなことがなくなり、便所へ行く時は届けられるようになった。
- ・ 放浪性もなくなり、秋の遠足は母親の同伴なしで行けるようになった。
- ・ 学習態度はよくないが、テストに対しては真剣に取り組んでいた。
- ・ 教師の手伝いをよくし、よく話しかけてくるようになった。
- ・ 女の子どもに親切になったが、女の子どもや女教師に対するキスは、あいかわらずおらず、担任の陰部も時々さわることがあった。
- ・ 母親も子どもにまったく安心したようで、担任に手紙も書かないようになった。

## VI まとめと考察

ふたりの相談員が評定したそれぞれの過程尺度評定値の間の相関係数は、ピアソンの相関法によれば 0.857 であったが、この相関係数の信頼限界 ( $\rho$ ) を、信頼率 95 パーセントとして計算すると、

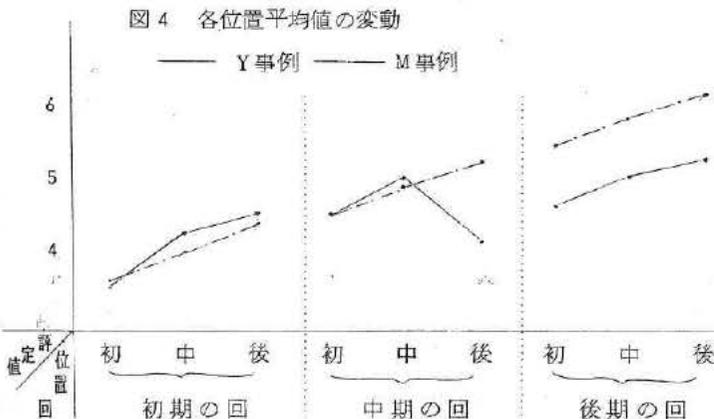
0.78 ≤ ρ ≤ 0.91 となる。この結果、二つの過程尺度評定値の真の相関は、95パーセントの信頼率で、0.78から0.91までの間にあり、二つの評定値の間には高い相関があることがわかる。したがって、「Ⅴ」で述べた過程尺度評定値には、高い信頼性があるものと考え、過程尺度による評定結果を考察するとともに、「Ⅱ」で設定した四つの仮説を検討する。

### 1 研究仮説1について

継続的なカウンセリングの各回の平均評定値を比較すると、後期の回の平均評定値は前期の回の評定値よりも高いという研究仮説1を検討するために、Y事例とM事例についての各回平均値の変動を統計的に検定したところ、その変動に有意差は認められなかったが、「図3」に示したとおり、かなり明瞭に予測された傾向が見いだされた。したがって、さらに多くの事例について研究を試みることによって研究仮説1は検証できる可能性があると考え。したがって、この仮説は採択され得ると考える。

なお、Y事例とM事例の各回平均値の変動の度合を比較すると、Y・M両事例は、同じ各回平均値から出発しながら、カウンセリング後期にいたると、両事例の間に0.9の差異が生じている。この差異は統計的に意味あるものではないが、これは、カートナー(Kirtner, W. H.)やカートライト(Cartwright, D. S.)などが述べているように、(注24)、クライアントの側の条件——クライアントの人格特性など——によるものか、それともカウンセラーの側の条件によるものかなど、他の評定尺度による評定結果と比較考察しながら、さらに追究すべき重要な問題である。

### 2 研究仮説2について



継続的なカウンセリングの各回において、位置平均値を比較すると、終わりの方の位置平均値は、初めの方の位置平均値より高いであろうという研究仮説2の前半を検討するために、各回ごとに位置平均値の変動を統計的に検定したところ、その変動に有意差は認められなかったが、「図4」に示したとおり、1つの例外(Y事例の中期の回にみられる中央の高い山型カーブ)を除くと、他はすべて予測した方向にある。この一つの例外が予測に反

する重要な反証であるとは言いがたい。というのは、要因分析によって位置平均値の変動を総合的に分析すると、Y・Mいずれの事例についても、後半の位置平均値は前半の位置平均値より有意に高いからである。

カウンセリングの各回における位置平均値の変動は、全回をととしての位置平均値の変動よりも小さいであろうという研究仮説2の後半については、この研究結果の統計的検定において、その変動の差異に統計的な有意性を確かめることはできなかったが、「図4」に示したとおり明らかに予測を裏づけているように思われる。すなわち、各回ごとの変動にみられる最大の差異は、Y事例については0.9、M事例については0.8であるのに対して、全回をととしての変動にみられる差異は、Y事例については1.7、M事例については2.4であるからである。

したがって、研究仮説2は、さらに多くの事例について研究を試みることによって、検証し得る可能性があるように思われる。したがって、研究仮説2は採択され得ると考える。

しかしY事例に関する中期の回の位置平均値の変動は、この研究におけるただ一つの予測に反する変動であるが、これは他の評定尺度による評定結果と関連考察をして、さらに追究すべき重要な問題であろう。この問題については、トムリンソン(Tomlinson, T.M.)、ハート(Hart, J.T)などがカウンセリングの各回におけるクライアントの人格変容の過程は、カウンセリング回数が重ねられるにつれてクライアントに生ずる人格変容に類似しているのではないかと示唆している(注25)。すなわち、カウンセリングの各回における位置平均値の変動は、カウンセリングの成功度と関連があり、カウンセリングの成功度が低いと、各回の後半の位置平均値が低くなる場合が比較的によくあらわれるのではないかと考えられる。したがって、カウンセリングの中期の回において、後半の位置平均値が低くなったという予測に反した傾向があらわれたことは、過程尺度の信頼性について、さらに深く追究しなければならないことはもちろん、カウンセリングにおけるクライアントの人格変容の過程は、かならずしも継続的な建設的な人格変容の過程をたどらないのではないかという問題も、すでに研究仮説1において述べた問題点と関連して、さらに深く追究されなければならない。

なお、研究仮説1に関連することであるが、カウンセリングの全過程をととしての位置平均値の変動を要因分析によって総合的に分析すると、この変動は統計的に有意である。すなわち、カウンセリングの回数が重ねられるにつれて、位置平均値は高まることは明らかである。このことは、研究仮説1を支持する有力な根拠の一つとなる。

### 3 研究仮説3について

過程尺度評定値が高くなれば、外部的基準に基づく評定においても、なんらかの建設的な人格変容が認められるであろうという研究仮説3の後半——外部的基準に基づく評定結果——を検討するために、Y・M両事例に2回にわたり実施した諸テストや諸調査の結果を統計的に検定したところ、すべての結果に統計的に有意な人格変容は認められなかったが、かなり明瞭に予測を裏づける結果が得られた。すなわち、

- 1) Y・M両事例とも、統計的検定において、なにかしらの建設的な人格変容が明らかに生じているという結果が得られたもの——クライアント範ちゅうによる分類結果
- 2) Y・M両事例になにかしらの建設的な人格変容が生じていると考えられるが、検定結果では、そのうちの1事例の変容だけに有意な差異が得られたもの——親子関係診断テスト結果、社会成

#### 熟度診断検査結果

- 3) 統計的な検定によって有意差を確かめることはできないが、Y・M両事例になにかしらの建設的な人格変容が生じたと思われるもの——担任教師による評定と所見，田中ビネー式知能検査結果
- 4) Y・M両事例とも、建設的な方向に変容したかどうか判定しがたいもの——矢田部ギルフォード性格検査結果

また研究仮説3の前半——過程尺度評定値の変動——については、すでに研究仮説1と2において述べたように、過程尺度評定値はカウンセリングが進行するにしたがい高まっている。したがって、1)・2)・3)で述べた評定尺度や調査基準と関係づけて、この過程尺度はカウンセリングの効果を弁別できるのではないかと考えられる。しかしわずかに2事例の結果によって結論をくだすことは早計であり、今後さらに多くの事例について研究を試みなければならない。

したがって、研究仮説3は採択し得るか、修正すべきか、それとも変更すべきかは、さらに多くの事例についての研究結果をまたなければならない。

#### 4. 研究仮説4について

外部的基準によって、建設的な人格変容の度合いが高いと評定された事例に対する過程尺度評定値は、同じ外部的基準によって、変容の度合いが低いと評定された事例に対する過程尺度評定値よりも高いであろうという研究仮説4を検討するために、まず第1にY・M両事例に2回にわたり実施した諸テストや諸調査の結果に基づいて、Y事例に生じた建設的な人格変容の度合いとM事例に生じた変容の度合いを比較した結果は、次のようにまとめられる。

- 1) M事例に生じた変容の度合いがY事例に生じた変容の度合いよりも大きく、その差異は統計的検定において、有意であるという結果が得られたもの——親子関係診断テスト結果，社会成熟度診断検査結果
- 2) M事例に生じた変容の度合いがY事例に生じた変容の度合いよりも大きいですが、その差異は、統計的検定において有意であると確かめることができなかつたもの——クライアント範ちゅうによる分類結果，田中ビネー式知能検査結果，担任教師の評定と所見

したがって、外部的基準に基づく評定結果によれば、M事例に生じた建設的な人格変容の度合いは、Y事例に生じた変容の度合いよりも、明らかに大きいと言える。

第2に、Y・M両事例についての過程尺度評定値の変動を比較すると、各回平均値によれば、Y事例の評定値は第3段階（3.9）から始まって第4段階（4.8）に上昇しているのに対して、M事例の評定値は第3段階（3.9）から始まって第5段階（5.7）に上昇している。Y・M両事例の間の差異は統計的に有意ではないが、両事例の間になりに明瞭な差異があるといえる。というのは、ウォーカー（Walker, A. M.）やラブレ（Rablen, B. A.）などが、「著しい進歩を示す事例の変動は、2.3, 2.0, 1.5であった。この群全体の変化平均は1.93となった。最少の進歩を示す事例では、変動は1.2, 0.3, -0.6であり、全体の平均は0.30となった。この2群の間に重複がみられないことは、注目すべきである。」（注26）と述べているからである。

したがって、わずかに2事例についての研究結果であるが、かなり明瞭に予測を裏づける傾向が得られており、さらに多くの事例について研究を試みることによって、研究仮説4は検証できると考える。し

たがってこの仮説は採択され得ると考える。

なお、トムリンソンやハートによると、「成功度の高い事例は、成功度の低い事例に比べて、ほとんどいつも、その過程が比較的高い段階から始まる。」(注27)と述べているが、本研究におけるY・M両事例は、まったく同一の段階から出発しながら、M事例がY事例よりかなり著しい進歩を示しており、彼らの研究と異なる結果が得られている。このことは、カウンセリングの成功度の高い事例は、カウンセリングの成功度の低い事例とは、異なる人格特性を備えているというカートナーやカートライトの主張と関連して、さらに深く追究しなければならない重要な問題であろう。

## むすび

この研究は、カウンセリングの過程に関するロジャーズの概念——クライアントの心理的機能が、停滞と固着の状態から変易性と流動性に向かうという考え——に基づいて、試験的な仮説として理論的に構成された過程尺度の信頼性と妥当性を究明したものである。この目的を究明するにあたり、かなり多くの研究対象事例を選定し、計画を実践していたが、新潟地震に伴ういろいろの悪条件のため、ほとんどの事例がカウンセリングを中断してしまい、この研究は事例の研究に終わってしまった。したがってこの過程尺度の信頼性や妥当性を究明するために設定された四つの研究仮説を検証することはできなかったが、この問題は来年度の研究課題として継続的に研究する予定である。しかし、本年度の研究によって、以上の四つの研究仮説をかなり明確に裏づける結果が得られたと考える。したがって、さらに多くの事例に適用して研究を進めることにより、四つの研究仮説を検証することが可能であると考えられるばかりでなく、さらにこの過程尺度の評定基準をいっそう客観化し、その信頼性と妥当性を高めることができると思われる。ということは、人格変容についての一つの重要な次元——変容とは、新しい定着に向かって動くことであるという従来の考え方に対する次元——が開拓され得ることを意味しており、そして、また過程の概念とその尺度がよりいっそうの発展をみるならば、カウンセリングと人格変容、そしておそらく社会の変化についてのわれわれの知識にとって重要な意味をもつことになるであろうと考えられる。

最後に、これまでの研究結果を要約して述べ、むすびとしたい。

- 1 ふたりの評定者による過程尺度評定値の間に、0.857の相関係数が得られたが、この数値はじゅうぶん高い信頼度をあらわしている。
- 2 カウンセリング回数が重ねられるにつれて、過程尺度評定値は高くなる。これは継続的、建設的な人格変容はカウンセリングと関数関係にあること、また過程尺度はこの変容に敏感であることなどをあらわすのではないかと考えられる。
- 3 カウンセリングの各回においても、後半部についての過程尺度評定値は、前半部についての評定値より高くなる傾向がある。この傾向はカウンセリングの成功度が高い事例に顕著にあらわれる。したがって、各回における評定値の変動は成功度と関数関係にあるのではないかと考えられる。
- 4 過程尺度評定値が高くなれば、外部的基準による評定結果においても、なにかしらの建設的人格変容が認められる。しかし、この変容はすべての外部的基準に基づく評定結果にあらわれるとはかぎらない。これはクライアントの内部の心理的機能の変容は、彼のすべての外部的行動

の変容を伴うとはかぎらないことをあらわしているのではないかと考えられる。

- 5 カウンセリングの全過程をとおして、過程尺度評定値の変動をみると、成功度の低い事例の変動は、成功度の高い事例の変動よりも小さく、しかも中だるみの傾向がみられる。また、成功度の低い事例についての過程尺度評定値は、成功度の高い事例についての評定値よりも低い。したがって、過程尺度は、外部的基準によって成功度が高いと評定された事例と、成功度が低いと評定された事例とを弁別すると思われる。

なお、この研究を担当したのは、小川敏通，堺嘉治で，執筆したのは，堺嘉治である。

### 参 考 文 献

- 注 1 Rogers, C. R. 著 The Process Equation of Psychotherapy 1961  
邦訳 伊東博訳編 カウンセリングの過程 1964 誠信書房 P77
- 注 2 Rogers, C. R. 著 The Necessary and Sufficient Conditions  
of Therapeutic Personality Change(1957)  
邦訳 島瀬・阿部共訳編 来談者中心療法——その発展と現況—— 岩崎書店 1964  
P208
- 注 3 注 1 と同じ P97
- 注 4 Rogers, C. R. & Rablen, R. A. 著 A Scale of Process in  
Psychotherapy 1958  
邦訳 伊東博訳編 カウンセリングの過程 1964 誠信書房 P119
- 注 5 島瀬・阿部共訳編 来談者中心療法——その発展と現況—— 岩崎書店 1964 P80
- 注 6 山本和郎・越智浩示郎 心理療法過程の現象学的研究 臨床心理 1963 Vol 2 P3
- 注 7 注 4 と同じ P121
- 注 8 伊東博訳編 カウンセリングの過程 1964 誠信書房 P117
- 注 9 伊東博監修 学校カウンセリング 誠信書房 1963 P149
- 注 10 新潟県立教育研究所 研究紀要第 33 集 子どものための教育相談〔1〕 P9
- 注 11 Snyder, W. U. 著 An Investigation of the Nature of Non-  
directive Psychotherapy 1945  
邦訳 伊東博訳編 カウンセリングの基礎 誠信書房 1960 P128
- 注 12 注 4 と同じ P124
- 注 13 注 11 と同じ P130
- 注 14 Seeman, J. 著 A Study of the Process of Nondirective  
Therapy 1949  
邦訳 注 11 と同じ P167
- 注 15 岩原信九郎著 新教育統計法 日本文化科学社 1955 P46(以下、統計については、す  
べてこの著書を参考にした。)
- 注 16 藤土圭三 カウンセリング過程の研究 広島県立教育研究所 1963 P8

- 注 17 高柳信子 ロジャーズのプロセス・スケールの適用とその検討 第24回日本心理学会抄録 1964
- 注 18 注 15 と同じ P52
- 注 19 増田元三郎著 実験計画法大要 学術図書出版社 1949 P26
- 注 20 注 11, 注 14 と同じ P139, P163
- 注 21 注 14 と同じ P164
- 注 22 矢田部達郎他著 矢田部ギルフォード性格検査手引 1960 P3
- 注 23 千輪浩監修 臨床心理学 誠信書房 1958 P183
- 注 24 Kirtner, W.L. & Cartwright, D.S. 著 Success and Failure in Client-centered Therapy as a Function of Client Personality Variables 1958  
邦訳 注 4 と同じ P367
- 注 25 Tomlinson, T.M. & Hart, J.T. 著 A Validation Study of the Process Scale 1962  
邦訳 注 4 と同じ P167
- 注 26 Walker, A.M., Rablen, R.A. & Rogers, C.R. 著 Development of a Scale to Measure Process Changes in Psychotherapy 1960  
邦訳 注 4 と同じ P112
- 注 27 注 25 と同じ P163